

高知市方言の上昇遅れと下降早まり

高山 林太郎 (東京大学大学院)
takayama_rintaro@nifty.com

1. はじめに— “なまけ” について

中井幸比古 (1997) 『高知市方言アクセント小辞典』と同じ話者 (下原瑞恵氏) を調査し、同辞典に記されている音韻現象の詳細な記述を目指した。小辞典には「低起式の上昇の 1 拍遅れ」(例: ウ[サギ〜ウサ[ギ (兎), ア[ルイチュー〜アルイ[チュー (歩いとる)) と「下げ核の下降の 1 拍早まり」(例: [アカル]イ〜[アカル]ルイ (明), [キルま]い〜[キル]まい (着)) の現象が具体例として記述されている。これらの現象を下原氏は“なまけ” (造語) と呼び、古い世代の発音に対する若い世代の発音であり、自分にとってより楽な発音であって、使用頻度が高い発音であるとする。他方で、“なまけ” を起こさない発音は、古い世代の発音であり、使用頻度が低い自分も使用することはあり、特に強調を表す場合には選好して使用する発音であるとする (また逆に、“なまけ” を起こした発音を、強調を表す為に用いるケースも中にはある)。音韻現象としては「低起式の上昇の 1 拍遅れ」と「下げ核の下降の 1 拍早まり」は全くの別物であるが、話者の心内辞書という共時的な体系内において占める通時的な地位が同様であることから下原氏はこれらをいずれも“なまけ” と呼ぶのであって、これらの音韻現象の通時的な位置付けを“なまけ” という造語は示している。本稿では下原氏が“なまけ” であると確かに内省した現象だけを取り扱っている。

2. 低起式の上昇の 1 拍遅れについて

「低起式の上昇の 1 拍遅れ」については、モーラ音素を含む語について見ると「イッ[コ (一個), ア[ンキ〜アン[キ (暗記), ギョ[一ギ〜ギョー[ギ (行儀), サ[イショ〜サイ[ショ (最初)] のような上昇位置が下原氏にはありうる。「ア[ンキ, ギョ[一ギ, サ[イショ」も“なまけ” 以前の形として使うことがあるという点が小辞典の記述と一部異なる。また、「ア[ルイチュー〜アルイ[チュー (歩), ハ[イッチュー〜ハイッ[チュー (入), カ[カエチュー〜カカエ[チュー (抱)] のように「1 拍遅れ」の「拍」がモーラでなく音節または音節相当のものに該当するケースも少数ながら存在する (※小辞典には「カ[カエチュー〜カカ[エチュー」とあるが、その発音も可能であろうと考える)。モーラ数の多い複合語などの場合には複合語内部境界などにまで“なまけ” が進みうる点は小辞典の記述通りである。「低起式の上昇の 1 拍遅れ」については他に特に述べるべきことはない。

3. 下げ核の下降の 1 拍早まりについて

「下げ核の下降の 1 拍早まり」については、小辞典の記述より更に詳しいことが判明したので、本稿ではこの点を主に記述する。形容詞・情態副詞など (例: [アカル]イ〜[アカル]ルイ (明), (1) [カルガ]ルと〜[カル]ガルと (軽々), (2) [イジ]イジと〜[イ]ジイジと, (3) [オキ]たい〜[オキ]たい (置), (4) [キルま]い〜[キル]まい (着), (5) [キリ]ャー〜[キ]リャ) で

起こる現象であり、形容詞について規則的に起こる（4拍以上の高起式のn拍形容詞にHn-1型とHn-2型が併用され、5拍以上の低起式のn拍形容詞にLn-1型とLn-2型が併用され、Hn-2型やLn-2型が“なまけ”に当たる）ことは小辞典の記載通りであるからその点について本稿ではこれ以上は扱わないこととする。

そのほか、「順接」（高く入れば高く付き、低く入れば低く付く）の有核の機能語が「低接」（必ず低く付く）に変化すること（例：エ[一の]わ～エ[一の]わ（良；伝統的な形式体言「が」とは別に共通語的な形式体言「の」も使用され、変化を被ったと考えられる）、(6)[ニワの]わ～[ニワ]のわ（庭）、(7)[ニワよ]り～[ニワ]より、(8)[ニワこ]そ～[ニワ]こそ、(9)[ニワな]ら～[ニワ]なら、(10)[ニワま]で～[ニワ]まで、(11)[ニワら]ー～[ニワ]らー、(12)[ニワさ]え～[ニワ]さえ、(13)[ニワし]か～[ニワ]しか、(14)[ニワや]ら～[ニワ]やら、(15)[ニワな]り～[ニワ]なり、(16)[ニワで]も～[ニワ]でも、(17)[キルけ]んど～[キル]けんど（着）、(18)[キルま]で～[キル]まで、(19)[ザツな]ら～[ザツ]なら（雑）、(20)[ザツで]も～[ザツ]でも）も下原氏曰く“なまけ”であり、「下げ核の下降の1拍早まり」という大きな枠組みの中に取り込まれるものである。なお伝統的な形式体言「が」は「高接」（直前に下げ核があればそれを消去してでも高く付く）であり、例えば「[シ]ロイ（白）」に「[が]わ」が付くと「[シロイが]わ」となるもので、有核ではあるが順接ではないので「下げ核の下降の1拍早まり」は起こさない。以下では番号(1)～(20)を振った現象を個別に見ていく。

3.1. 「[カルガ]ルと～[カル]ガると（軽々）」等について（情態副詞）

情態副詞であり、高山林太郎（2013）で扱った「*アカア[カ]と」の類に該当する。京都では平安末期の段階で早くも「*[ピ]カピカと」の類に合流済みであるが、周辺の中央式の方言ではそうではない。高知市では「*アカア[カ]と（平安末期相当）>*アカアカと（室町相当）>アカア[カ]と>アカアカと」のように、一旦下げ核の位置が3拍目に移動したあと2拍目に巻き戻ったと見られ（※東京や岡山市では「ア[カア]カと」であり、3拍目に移動したままになっている）、下原氏が2種類の形を内省するのは通時的変化の前後の形をそのまま記憶しているものと考えられる。語例：[アオア]オと～[アオ]アオと、[アカア]カと～[アカ]アカと、[クログ]ロと～[クロ]グロと、[シロジ]ロと～[シロ]ジロと、…。

3.2. 「[イジ]イジと～[イ]ジイジと」等について（情態副詞）

情態副詞であり、高山（2013）で扱った「*[ピ]カ[ピ]カと～*[ピ]カピカと」の類に該当する。高知市や周辺部の中央式の方言では通常形の異音としての2単位形「[ピ]カ[ピ]カと」が存在することを高山（2013）で述べたが、下原氏の場合、2単位形は強調形である。1単位形について考えると、「*[ピ]カピカと（平安末期相当）>*[ピカ]ピカと>[ピ]カピカと」のように、一旦下げ核の位置が2拍目に移動したあと1拍目に巻き戻ったと見られ（※東京では1拍目が無声化する環境においてのみ巻き戻らず、「ピ[カ]ピカと、[キ]ラキラと」であり、岡山市では一切巻き戻らず、「ピ[カ]ピカと、キ[ラ]キラと」である）、下原氏が2種類の形を内省するのは通時的変化の前後の形をそのまま記憶しているものと考えられる（※

なお上記で「*[ピカ]ピカと」が再構形になっているのは、この語例に関しては回答が得られなかった為であり、下原氏の記憶にあれば古形が回答されるが無ければ回答されず、下原氏は機械的に作り出した形としてこれらの形を回答している訳ではない。語例：[イジ]イジと～[イ]ジイジと，[イラ]イラと～[イ]ライラと，[ウカ]ウカと～[ウ]カウカと，[ウキ]ウキと～[ウ]キウキと，…。

3.3. 「[オキた]い～[オキ]たい（置）」等について（動詞文節）

上述した形容詞の規則と同じである。語例：[きた]い（着），[シた]い（為），[ミた]い（見），[きた]い（来），[オキた]い～[オキ]たい（置），[フミた]い～[フミ]たい（踏），[カキた]い～[カキ]たい（書），[ノミた]い～[ノミ]たい（飲），[オリた]い～[オリ]たい（居），[アケた]い～[アケ]たい（開），[カエた]い～[カエ]たい（変），[タテた]い～[タテ]たい（建），[ナゲた]い～[ナゲ]たい（投），[キザミた]い～[キザミ]たい（刻），[ツナギた]い～[ツナギ]たい（繋），[コガシた]い～[コガシ]たい（焦），[サワギた]い～[サワギ]たい（騒），ア[ルキた]い～ア[ルキ]たい（歩），ハ[イリた]い～ハ[イリ]たい（入），[シラセた]い～[シラセ]たい（知），[ハジメた]い～[ハジメ]たい（始），[アズケた]い～[アズケ]たい（預），[アツメた]い～[アツメ]たい（集），カ[カエた]い～カ[カエ]たい（抱）。

3.4. 「[キルま]い～[キル]まい（着）」等について（動詞文節）

形容詞の規則とほぼ同じであり、n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが、低起式でも4拍語から変化が起きている。語例：[キルま]い～[キル]まい，[スルま]い～[スル]まい，ミ[ルま]い～ミ[ル]まい，ク[ルま]い～ク[ル]まい，[オクま]い～[オク]まい，[フムま]い～[フム]まい，カ[クま]い～カ[ク]まい，ノ[ムま]い～ノ[ム]まい，[オルま]い～[オル]まい，[アケルま]い～[アケル]まい，[カエルま]い～[カエル]まい，[タ]テルまい，[ナ]ゲルまい，[キザムま]い～[キザム]まい，[ツナグま]い～[ツナグ]まい，[コ]ガスまい，[サ]ワグまい，ア[ルクま]い～ア[ルク]まい，ハ[イルま]い～ハ[イル]まい，[シラセルま]い～[シラセル]まい，[ハジメルま]い～[ハジメル]まい，[アズ]ケルまい，[アツ]メルまい，カ[カエルま]い～カ[カエル]まい。

3.5. 「[キリャ]ー～[キ]リャ（着）」等について（動詞）

n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こり、その際に長音が消滅する場合がある。語例：[キリャ]ー～[キ]リャ，[スリャ]ー～[ス]リャ，ミ[リャ]ー～[ミ]リャ（※低起式が高起式に変わるケースもある），ク[リャ]ー～[ク]リャ，[オキャ]ー～[オ]キャ，[フミャ]ー～[フ]ミャ，カ[キャ]ー，ノ[ミャ]ー，[オリャ]ー～[オ]リャ(ー)，[アケリャ]ー～[アケ]リャー，[カエリャ]ー～[カエ]リャ(ー)，[タ]テリャー～タ[テ]リャ（※類推変化と見られる），[ナ]ゲリャー～ナ[ゲ]リャ，[キザミャ]ー～[キザ]ミャ(ー)，[ツナギャ]ー～[ツナ]ギャ，[コガシャ]ー～[コガ]シャ(ー)～[コ]ガシャ(ー)，[サ]ワギャー～[サ]ワギャ，ア[ルキャ]ー～ア[ル]キャ，ハ[イリャ]ー～ハ[イ]リャ，[シラセリャ]ー～[シラセ]リャ(ー)～[シラ]セリャ(ー)，[ハジメリャ]ー～[ハジメ]リャ(ー)～[ハジ]メリャ，[アズケリャ]ー～[アズケ]リャ～[アズ]ケリャ(ー)～[ア]ズケリ

ヤー, [アツメリヤ]ー～[アツメ]リヤ(ー)～[アツ]メリヤ(ー)～[ア]ツメリヤ(ー), カ[カエリヤ]ー～カ[カエ]リヤ(ー)～カ[カ]エリヤ(ー)。

3.6. 「[ニワの]わ～[ニワ]のわ (庭)」等について (名詞文節)

形容詞の規則と同じであり, n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こる。語例: [血の]わ, [巢の]わ, [名]のわ, [歯]のわ, 手[の]わ, 目[の]わ, [ニワの]わ～[ニワ]のわ (庭), [ミヅの]わ～[ミヅ]のわ (溝), [ゴマの]わ～[ゴマ]のわ (胡麻), [ヤ]マのわ (山), [イ]シのわ (石), ハ[リ]のわ (針), ア[メ]のわ～ア[メ]のわ (雨), [コトリ]のわ～[コトリ]のわ (小鳥), [トコロ]のわ～[トコロ]のわ (所), [チ]カラのわ (力), [イ]ノチのわ (命), [ア]サヒのわ (朝日), [アタ]マのわ (頭), [ムス]メのわ (娘), ツ[バ]キのわ (椿), ク[ス]リのわ (薬), ス[ズ]メのわ～ス[ズメ]のわ (雀)。

3.7. 「[ニワよ]り～[ニワ]より (庭)」等について (名詞文節)

形容詞の規則とほぼ同じであり, n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが, 3 拍文節から変化が起きている。語例: [血よ]り～[血]より, [巢よ]り～[巢]より, [名よ]り～[名]より, [歯よ]り～[歯]より, 手[よ]り, 目[よ]り, [ニワよ]り～[ニワ]より, [ミヅよ]り～[ミヅ]より, [ゴマよ]り～[ゴマ]より, [ヤ]マより, [イ]シより, ハ[リよ]り～ハ[リ]より, ア[メよ]り～ア[メ]より, [コトリよ]り～[コトリ]より, [トコロよ]り～[トコロ]より, [チ]カラより, [イ]ノチより, [ア]サヒより, [アタ]マより, [ムス]メより, ツ[バ]キより, ク[ス]リより, ス[ズ]メよ]り～ス[ズメ]より。

3.8. 「[ニワこ]そ～[ニワ]こそ (庭)」等について (名詞文節)

規則は同上。語例も同上(「より」を「こそ」に変えただけ)。

3.9. 「[ニワな]ら～[ニワ]なら (庭)」等について (名詞文節)

規則は同上。語例: [血な]ら～[血]なら, [巢な]ら～[巢]なら, [名]なら, [歯]なら, 手(一)[な]ら, 目(一)[な]ら, [ニワな]ら～[ニワ]なら, [ミヅな]ら～[ミヅ]なら, [ゴマな]ら～[ゴマ]なら, [ヤ]マなら, [イ]シなら, ハ[リな]ら～ハ[リ]なら, ア[メな]ら～ア[メ]なら, [コトリな]ら～[コトリ]なら, [トコロな]ら～[トコロ]なら, [チ]カラなら, [イ]ノチなら, [ア]サヒなら, [アタ]マなら, [ムス]メなら, ツ[バ]キなら, ク[ス]リなら, ス[ズ]メな]ら～ス[ズメ]なら。

3.10. 「[ニワま]で～[ニワ]まで (庭)」等について (名詞文節)

形容詞の規則とほぼ同じであり, n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが, 低起式でも 4 拍文節から変化が起きている。語例: [血]まで, [巢]まで, [名]まで, [歯]まで, 手(一)[ま]で, 目(一)[ま]で, [ニワま]で～[ニワ]まで, [ミヅま]で～[ミヅ]まで, [ゴマま]で～[ゴマ]まで, [ヤ]マまで, [イ]シまで, ハ[りま]で～ハ[り]まで, ア[メま]で～ア[メ]まで, [コトリま]で～[コトリ]まで, [トコロま]で～[トコロ]まで, [チ]カラまで, [イ]ノチまで, [ア]サヒまで, [アタ]マまで, [ムス]メまで, ツ[バ]キまで, ク[ス]リまで, ス[ズ]メま]で～ス[ズメ]ま

で。

3.11. 「[ニワら]ー～[ニワ]らー（庭）」等について（名詞文節）

「らー」は「なんか・たち」の意である。形容詞の規則とほぼ同じであり、n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが、3 拍文節から変化が起きている。語例：[血ら]ー～[血]らー，[巢ら]ー～[巢]らー，[名ら]ー～[名]らー，[齒ら]ー～[齒]らー，手(一)[ら]ー，目(一)[ら]ー，[ニワら]ー～[ニワ]らー，[ミヅら]ー～[ミヅ]らー，[ゴマら]ー～[ゴマ]らー，[ヤ]まらー，[イ]しらー，ハ[リら]ー～ハ[リ]らー，ア[メラ]ー～ア[メ]らー，[コトリら]ー～[コトリ]らー，[トコロら]ー～[トコロ]らー，[チ]カラらー，[イ]ノチらー，[ア]サヒらー，[アタ]まらー，[ムス]メラー，ツ[バ]キラー，ク[ス]リらー，ス[ズメラ]ー～ス[ズメ]らー。

3.12. 「[ニワさ]え～[ニワ]さえ（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例も同上（「らー」を「さえ」に変えただけ）。

3.13. 「[ニワし]か～[ニワ]しか（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例：[血し]か～[血]しか，[巢し]か～[巢]しか，[名]しか，[齒]しか，手(一)[し]か，目(一)[し]か，[ニワし]か～[ニワ]しか，[ミヅし]か～[ミヅ]しか，[ゴマし]か～[ゴマ]しか，[ヤ]ましか，[イ]ししか，ハ[リし]か～ハ[リ]しか，ア[メし]か～ア[メ]しか，[コトリし]か～[コトリ]しか，[トコロし]か～[トコロ]しか，[チ]カラしか，[イ]ノチしか，[ア]サヒしか，[アタ]ましか，[ムス]メしか，ツ[バ]キシか，ク[ス]リしか，ス[ズメし]か～ス[ズメ]しか。

3.14. 「[ニワや]ら～[ニワ]やら（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例も同上（「しか」を「やら」に変えただけ）。

3.15. 「[ニワな]り～[ニワ]なり（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例：[血な]り～[血]なり，[巢な]り～[巢]なり，[名な]り～[名]なり，[齒な]り～[齒]なり，手(一)[な]り，目(一)[な]り，[ニワな]り～[ニワ]なり，[ミヅな]り～[ミヅ]なり，[ゴマな]り～[ゴマ]なり，[ヤ]まなり，[イ]しなり，ハ[リな]り～ハ[リ]なり，ア[メな]り～ア[メ]なり，[コトリな]り～[コトリ]なり，[トコロな]り～[トコロ]なり，[チ]カラなり，[イ]ノチなり，[ア]サヒなり，[アタ]まなり，[ムス]メなり，ツ[バ]キシなり，ク[ス]リなり，ス[ズメな]り～ス[ズメ]なり。

3.16. 「[ニワで]も～[ニワ]でも（庭）」等について（名詞文節）

規則は同上。語例も同上（「なり」を「でも」に変えただけ）。

3.17. 「[キルけ]んど～[キル]けんど（着）」等について（動詞文節）

n-2 拍目に下げ核がある場合に変化が起こる。語例：[キルけ]んど～[キル]けんど，[スルけ]んど～[スル]けんど，ミ[ルけ]んど～ミ[ル]けんど，ク[ルけ]んど～ク[ル]けんど，[オクけ]んど～[オク]けんど，[フムけ]んど～[フム]けんど，カ[クけ]んど～カ[ク]けんど，ノ[ムけ]んど～ノ[ム]けんど，[オルけ]んど，[アケルけ]んど～[アケル]けんど，[カエルけ]んど～

[カエル]けんど, [タ]テルけんど, [ナ]ゲルけんど, [キザム]けんど~[キザム]けんど, [ツナグ]けんど~[ツナグ]けんど, [コ]ガスけんど, [サ]ワグけんど, ア[ルク]けんど~ア[ルク]けんど, ハ[イル]けんど~ハ[イル]けんど, [シラセル]けんど~[シラセル]けんど, [ハジメル]けんど~[ハジメル]けんど, [アズ]ケルけんど, [アツ]メルけんど, カ[カエル]けんど~カ[カエル]けんど。

3.18. 「[キル]まで~[キル]まで (着)」等について (動詞文節)

形容詞の規則とほぼ同じであり, n-1 拍目に下げ核がある場合に変化が起こるが, 低起式でも 4 拍文節から変化が起きている。語例は同上 (「けんど」を「まで」に変えただけ)。

3.19. 「[ザツ]なら~[ザツ]なら (雑)」等について (形容動詞文節)

規則は同上。語例: [ザツ]なら~[ザツ]なら (雑), [ス]キなら (好), イ[キ]なら~イ[キ]なら (粹), ウ[ブ]なら~ウ[ブ]なら (初), [イビツ]なら~[イビツ]なら (歪), [コマカ]なら~[コマカ]なら~[コマカ]なら (細), [オ]ロカなら (愚), ガ[サツ]なら~ガ[サツ]なら, ア[コ]ギなら (阿漕)。

3.20. 「[ザツ]でも~[ザツ]でも (雑)」等について (形容動詞文節)

規則は同上。語例: [ザツ]でも~[ザツ]でも, [ス]キでも, イ[キ]でも, ウ[ブ]でも~ウ[ブ]でも, [イビツ]でも~[イビツ]でも, [コマカ]でも, [オ]ロカでも, ガ[サツ]でも~ガ[サツ]でも, ア[コ]ギでも。

4. おわりに

3 節で見たように, (1) 名詞文節・動詞文節・形容詞・形容動詞文節・情態副詞という幅広い内容語において「下げ核の下降の 1 拍早まり」が観察されること, また, (2) だいたい形容詞に見られるのと同じような「下げ核の下降の 1 拍早まり」が, 元が順接の有核の機能語において各所で見られ, その結果として新しい発音においては低接に変化していること, の 2 点が分かった。(2) は高知市方言の機能語を扱う上で注意すべき点である。

参考文献

- 高山林太郎 (2013) 「日本語諸方言の四モーラ畳語を比較する試み」『東京大学言語学論集』 34, 143-183. 東京: 東京大学言語学研究室
- 中井幸比古 (1997) 『高知市方言アクセント小辞典』神戸: 私家版
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』東京: 勉誠出版

三重県鈴鹿市における3拍語のアクセント

竹内 はるか(國學院大學大学院)
y124209@kokugakuin.ac.jp

1. はじめに

本発表では、三重県鈴鹿市方言における3拍の名詞、動詞、形容詞のアクセントの実態を式の対立、所属語彙と型の相の観点から述べる。

三重県鈴鹿市は、服部(1930)の「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」や丹羽(2000)に述べられているように伝統的には京阪式のアクセントの地域である。しかし、近年報告があるように鈴鹿市では京阪式の体系を保持する話者と東京と似た体系を持つ話者が混在し、同一世代での個人差も大きい。このような複雑な当該地域のアクセントの実態を明らかにするために、拍数が比較的長く安定性があり、また古い文献による記録が残されており先行研究との比較も行いやすい3拍語に着目する。

三重県鈴鹿市のアクセントは、これまでに竹内(2015)(2017)で述べたように高起式、低起式という式の対立でみると以下の三つのタイプに解釈することができる。

- (1) 式の対立と下がり目の位置で解釈できるAタイプ
- (2) 拍数、型によって解釈の仕方が異なるABタイプ(式の対立が曖昧)
- (3) 下がり目の位置のみで解釈できるニュータイプ

本稿では上記の三つのタイプにわけ、三重県鈴鹿市における3拍語の実態を述べる。

Aタイプ、ABタイプは式の対立の他にも異なる特徴が観察される。Aタイプはそれぞれの型における所属語彙もほぼ京都と同様に観察される。それに対し、ABタイプは、共通語アクセント化が進んでいる様相が観察される。特にABタイプにおいて共通語アクセントで話される語がどれだけあるかについては個人差がみられる。

2. 調査について

調査日は2008年9月から2016年8月で、調査は対面式で行った。動詞と形容詞は共通語での文例を示し、それを普段の言い方でどう言うかを尋ねる方法で行った。

話者は、15～86歳の鈴鹿市生え抜きの話者42名で、特に本稿では、Aタイプの話者としてH.O(1931年生まれ、女性)を、比較的古相に近いABタイプ①の話者としてK.I(1985年生まれ、女性)、比較的共通語化が進んでいるABタイプ②の話者としてS.T(1988年生まれ、男性)の結果を中心に示す。

調査語は1拍から4拍の名詞と2拍から4拍の動詞と形容詞の活用形で、本稿では3拍の名詞125語、動詞75語、形容詞25語について詳述する。調査語彙は平山(1960)による。

調査地点である三重県鈴鹿市の人口は20万282人(2016年6月30日)で、県北部に位置する。また、古くから東海道の要所として上方と江戸の行き来が盛んで、市内では1616年44

番目の石薬師宿、1624年に45番目の庄野宿が設けられた。

現在の交通としては、公共の乗り物は近畿日本鉄道(近鉄)が主で、乗り換えを考えると大阪、京都へ出るよりは名古屋方面へ向かう方が容易である。

以下記号については●、▶は高く発音される拍を、○、▷は低く発音される拍を、◎は中間的な高さを示す。以下の京都アクセント、東京アクセントは平山(1960)によるものとする。

3. 3拍名詞のアクセント

3拍名詞のアクセントについて、以下に式の対立、安定している型、タイプによって大きく異なるアクセントが観察される型についてそれぞれわけて詳述する。

3.1. 式の対立について

式の対立については、Aタイプは対立を保持している相、ABタイプでは曖昧になっている相が観察される。具体的には表1のABタイプの①にみられるように「鰻が」など伝統的には低起式の○○○▶となる語を安定して●●●▶で発音するなど伝統的な式とは異なる式で発音する語がみられる、「鼠が」「狐が」など●●●▶、○○○▶のどちらで発音してもよい語が観察されることがあげられる。

京都アクセントが高起式平板型●●●▶になる語は、ABタイプにおいては一拍目が若干ゆるんで観察されるものの、低起式平板型より安定して京都と同じアクセントで観察される。ただし、ABタイプ②の話者では「桜が」や「机が」が●●●▶、○○○▶のどちらで発音してもよいなど低起式平板型の「鼠が」「狐が」などと同様の様相も観察された。

表1 京都アクセントが低起式平板型の語のアクセント

京都アクセント	類	語彙	Aタイプ	ABタイプ①	ABタイプ②	東京式アクセント
○○○▶	1	昔	●●●▶	◎●●▶~●●●▶	◎●●▶~●●●▶	○●●▶
	6	兎	○○○▶	○○○▶	○○○▶	
		鰻	○○○▶	◎●●▶~●●●▶	○○○▶	
		狐	○○○▶	○○○▶~◎●●▶	○○○▶	
		スズメ	○○○▶	○○○▶	○○○▶	
		背中	○●○▷	○○○▶	○○○▶~○●○▷	
		鼠	○○○▶	○○○▶~◎●●▶	○○○▶	
	6	裸	○○○▶	○○○▶~◎●●▶	○○○▶	
		ヒバリ	○○○▶	◎●●▶~●●●▶	◎●●▶~●●●▶	
		誠	○○○▶	NR	○○○▶	
		ミミズ	○○○▶	○○○▶	○○○▶	

3.2 安定して観察される型について

京都アクセントと東京式アクセントが同じ語、たとえばどちらも頭高型●○○▷である語「えくぼが(2類)」「鮑が(3類)」「鯿が(5類)」などは全タイプを通じほぼ安定して頭高型で観察される。ただし、ABタイプにおいては●○○▷~○●○▷でゆれが観察される語「枕が」「涙が」などが少数みられる。「枕が」「涙が」などは名古屋アクセントが○●

○▷となる語である。

京都アクセントが○●○▷である語については表 2 にあるように東京アクセントがどのような型であっても比較的安定して全年層を通じ○●○▷型を保持している。このような安定性は当該地域においては他の型にみられないもので、当該地域において○●○▷型は安定性があると考えられる。

表 2 京都アクセントが○●○▷型の語のアクセント

京都アクセント	類	語彙	Aタイプ	ABタイプ①	ABタイプ②	東京式アクセント	
○●○▷	2	翼	●●●▷	◎●●▷～●●●▷	◎●●▷～●●●▷	○●●▷	
		つるべ	N R	N R	◎●●▷～●●●▷		
		トカゲ	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		ムカデ	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
	7	後ろ	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		鯨	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		薬	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		タライ	○●○▷	○○▷	◎●●▷～●●●▷		
	6	2 緑	○●○▷	○●○▷	○●○▷		●○○▷
		高さ	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		狸	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		7	蚕	○●○▷	○●○▷	○●○▷	
			兜	○●○▷	○●○▷	○●○▷	
			便り	○●○▷	●○○▷	○●○▷	
			椿	○●○▷	○●○▷	○●○▷	
		病	○●○▷	●○○▷	○●○▷		
	2	毛抜き	○●○▷	○●○▷, ●●●▷	○●○▷	○●●▷	
		二つ	●●○▷～○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		二人	●●○▷～○●○▷	○●○▷～●●○▷	○●○▷		

3.3 タイプによって大きく異なるアクセントが観察される型について

東京で○●●▷となる語は、当該地域のAタイプとABタイプで異なるアクセントが多く観察される。特にABタイプでは京都アクセントでは観察されない尾高型◎●●▷～●●●▷が観察される。この尾高型は、初めの高さに関しては東京とは異なり語中であっても高く始まっても、若干ゆるんだ高さになっていてもよい。

また、同じABタイプでも話者によって○●○▷と●○○▷で異なったアクセントで観察されていたり、個人内でも○●○▷～●○○▷でゆれていたりする語がある。これは榎垣 (1957)、村中 (2005) にあるように京阪式アクセントにおける●●○からの○●○や○○への変化が関係していると考えられる。今回の調査において●●○▷型が観察されたのは、「小豆」「二つ」「二人」の3語であった。ただし、●●○▷のみが安定して観察されることはなく、3語とも○●○▷でも発音される。しかし●●○▷型は1985年生まれのABタイプでも観察された。どの語がどちらの型で発音される場合が多いのかなどは今後の課題である。

表3 東京式アクセントで尾高型となる語のアクセント

京都アクセント	類	語彙	Aタイプ	ABタイプ①	ABタイプ②	東京式アクセント
●●●▷	1	麓	●●●▷	○●○▷~●●●▷~◎●●▷	○●○▷~●●●▷~◎●●▷	○●●▷
		恨み	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		暦	●○○▷	◎●●▷~●●●▷	○●○▷	
		林	●●●▷	◎●●▷~●●●▷	◎●●▷~●●●▷	
		仏	●●●▷	◎●●▷~●●●▷	◎●●▷~●●●▷	
●○○▷	2	小豆	●○○▷	●○○▷	●○○▷	○●●▷
	3	力	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
	4	頭	●○○▷	○●○▷	○●○▷	
		イタチ	○●○▷	○●○▷	◎●●▷~●●●▷	
		扇	●○○▷	○○○▷	○○○▷	
		男	●○○▷	●○○▷~○●○▷	●○○▷	
		面	●○○▷	N R	●●●▷~◎●●▷	
		鏡	●○○▷	○●○▷	○●○▷	
		仇	●○○▷	●○○▷~○●○▷	○●○▷	
		刀	●○○▷	○●○▷	○●○▷	
		瓦	●○○▷	●○○▷	○●○▷	
		宝	●○○▷	●●●▷~◎●●▷	●●●▷~◎●●▷	
		袴	●○○▷	○●○▷	○●○▷	
		東	●○○▷	◎●●▷~●●●▷	◎●●▷~●●●▷	
		光	●○○▷	●●●▷~◎●●▷	●●●▷~◎●●▷	
		響き	●○○▷	●●●▷~◎●●▷~●○○▷	●●●▷~◎●●▷	
	袋	●○○▷	○●○▷	○●○▷		
	筵(ムシロ)	●○○▷	N R	◎●●▷~●●●▷		
	5	襷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
	○○○▷	2	昨夜(ゆうべ)	○○●▷	○○●▷	
○●○▷	2	毛抜き	○●○▷	○●○▷~●●●▷	○●○▷	
		二つ	●●○▷~○●○▷	○●○▷	○●○▷	
		二人	●●○▷~○●○▷	○●○▷~●●○▷	○●○▷	

4. 3拍動詞・終止形のアクセント

鈴鹿市における3拍動詞のアクセントは、Aタイプ、ABタイプともに四つの型が観察された。●●●：高起式で下がり目のない型、○○●：低起式で下がり目のない型、○●○：低起式で2拍目に下がり目がある型、●○○：頭高型である。

●●●で観察されるのは主に1類の語、2類の五段活用の語である。○○●で観察されるのは主に3類の語である。○●○で観察されるのは主に2類の一段活用の語である。京都では2類の一段活用の語は○○●で観察されるが、丹羽(2000)にあるように三重県鈴鹿市においては伝統的に○●○型で観察される。

表4にあるようにAタイプとABタイプで大きく異なるのは、Aタイプにおいて○○●型で観察される語、すなわち主に3類の語である。具体的には「歩く(3類)」「入る(3類)」「遊ぶ(1類)」がABタイプでは○●○で発音されている。特にニュータイプでは、○○●型が観察されず、すべて○●○に変化している。

表4 京都アクセントが○○●の動詞アクセント

京都アクセント	類	語例	Aタイプ	A Bタイプ①	A Bタイプ②	ニュータイプ	東京式アクセント
○○●	1A	遊ぶ	○○●	○○●	○○●	○○●	○●●
	1B	植える	○○●	○●○	○●○	○●○	
		捨てる	●●●	●●●~◎●●	●●●~◎●●	○●○	
	2B	生きる	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		起きる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		落ちる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		掛ける	○●○	○●○	○●○	○●○	
		覚める	○●○	○●○	○●○	○●○	
		建てる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		付ける	○●○	○●○	○●○	○●○	
		溶ける	○●○	○●○	○●○	○●○	
		撫でる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		逃げる	○●○	○●○	○●○	○●○	
	晴れる	○●○	○●○	○●○	○●○		
	3	歩く	○○●	○○●	○●○	○●○	
		隠す	○○●	○○●	○●○	○●○	
	3	入る	○○●	○●○~○○●	○○●	○●○	

5. 3拍形容詞・終止形のアクセント

表5 3拍形容詞のアクセント

京都アクセント	類	語例	Aタイプ	ABタイプ①	ABタイプ②	ニュータイプ	東京式アクセント	名古屋アクセント		
●○○	1	赤い	●○○	●○○	○●○	○●○	○●●	○●○		
		浅い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		厚い	●○○	●○○	○●○	○●○				
		甘い	●○○	●○○	○●○	○●○				
		荒い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		薄い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		遅い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		重い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		堅い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		軽い	●○○	●○○	●○○,○●○	○●○				
		暗い	●○○	●○○	●○○,○●○	○●○				
		遠い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		2	熱い	●○○	●○○	●○○			○●○	○●○
			黒い	●○○	●○○	○●○			○●○	
	白い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	高い		●○○	●○○	●○○,○●○	○●○				
	近い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	強い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	長い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	早い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	低い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	深い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	古い	●○○	●○○	○●○	○●○					
	弱い	●○○	●○○	○●○	○●○					
	2	多い	●○○	●○○	●○○	○●○	●○○			

3拍形容詞の京都アクセントは1類、2類ともに●○○とされている。

鈴鹿市においても、Aタイプ、すなわち高年層や古相を保つ若い世代は「赤い」「白い」など1類、2類ともに●○○で観察される。ただし、ABタイプでも共通語アクセント化が進んでいる話者やニュータイプにおいては1類、2類ともに○●○型で発音する語が観察される。特に、式の対立を保持しておらず、異なる拍数や品詞で共通語アクセント化が進んでいるニュータイプの若年層話者においては1類、2類ともに○●○のみが観察された。

芥子川(1983)にあるように、名古屋では東京のアクセントと異なり3拍形容詞は1類、2類ともに○●○で発音される。みかけでは3拍形容詞・終止形のアクセントは名古屋アクセントと同じに変化している。ただし、名古屋アクセントの影響を受けたのか、頭高型のアクセントからアクセント核を一つ後ろに送る型への変化が進んだのかについては活用形のアクセントなどもふまえて今後の考察課題としたい。

6. おわりに

名詞は、式の対立が曖昧になりつつある様相が観察される。具体的には伝統的には低起式の○○○▶となる語を安定して●●●▶で発音するなど伝統的な式とは異なる式で発音する語がみられる、●●●▶、○○○▶のどちらで発音してもよい語が観察されるなどである。動詞は各年層を通じて古相を保持しており、類と型の対応がある。「歌う」や「余る」など1類と2類の五段活用の語が●●●、「生きる」など2類の一段活用の語が○●○、「歩く」など3類が○○●で対立を示し、式の対立を保持しているが、3類の○○●は○●○に変化しつつある。形容詞は、高年層や古相を保つ若い世代は「赤い」「白い」など1類、2類ともに●○○で観察される。ただし、変化が進んでいる新しいタイプの若年層は1類、2類ともに○●○で観察される。品詞全体を通し○●○型は安定した型であるといえる。

参考文献

- 榎垣実 (1957) 「大阪方言アクセント変化の傾向」『近畿方言双書 方言論文集』2
- 芥子川律治(1983) 「愛知県方言」『中部地方の方言』(「講座方言学」6) 国書刊行会
- 竹内はるか (2015) 「三重県鈴鹿市のアクセントの研究」『國學院大學大学院紀要－文学研究科－』第46輯
- 竹内はるか (2017) 「三重県鈴鹿市における用言の活用形のアクセント」『國學院大學大学院紀要－文学研究科－』第48輯
- 西宮一民 (1961) 「方言の実態と共通語化の問題点 三重・奈良・和歌山」東条操監修『方言学講座 第三巻 西部方言』東京堂
- 服部一郎 (1930) 「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」『音声の研究』第3輯 岡書院
- 平山輝男・丹羽一彌ほか (2000) 『日本のことばシリーズ24 三重県のことば』 明治書院
- 平山輝男編 (1960) 『全国アクセント辞典』第22刷 東京堂出版
- 村中淑子 (2005) 「大阪における3拍名詞のアクセント－東大阪市100人調査の結果より－」『姫路獨協大学外国語学部紀要』18 姫路獨協大学

漢語類別語彙の検討

(Examination of the Classification of Chinese Characters on Accentuation)

秋山 英治 (愛媛大学法文学部)
akiyama.eiji.mk@ehime-u.ac.jp

1. はじめに

日本語諸方言アクセントにおいて、金田一(1980)や奥村三雄氏の一連の研究によって、漢語にも和語に準じる類別語彙があることが知られている。しかし、この語彙について検証した研究は、管見の範囲では中井(1997b)がある程度である。そのため、漢語類別語彙が、諸方言間の対応を示すものとして使用できるものであるのか、よくわかっていない。本発表では、漢語類別語彙について現代方言をもとに比較検討した結果を述べる。

2. 漢語類別語彙候補語の抽出

漢語類別語彙については、金田一(1980)と奥村氏の一連の研究で、類のたて方、類の所属語などに違いがみられる。金田一(1980)は、1・2拍語の記述しかなく、3拍語はない。また、1拍語では第2類、2拍語では第2・5類を欠く。一方、奥村氏の一連の研究(1955・1961・1963・1964・1974・1981・1990)では、研究によって類語としてあがっている語に違いがあり、また同じ語でも研究によって類の認定が異なるものもある。さらに、奥村(1961)では、2拍第2・3類が区別されず同じ類として記述されており、類の認定が難しいものもある。

そこで、金田一(1980)および奥村氏の一連の研究(1955・1961・1963・1964・1974・1981・1990)より、現代では使用しないと思われるものを除き、どれか1つでも類語としてあがっていれば、それを検討対象語(「候補語」)として抽出した。3拍語については、金田一(1980)に記述がないことから、奥村氏の一連の研究より抽出した。類の認定は、奥村氏の一連の研究にしたがった。金田一(1980)と奥村氏の一連の研究とで類が異なる語は、奥村氏の類を採った。奥村氏の一連の研究のなかで、類が異なる語については、一番新しい研究の類を採った。奥村(1961)で、区別されていない2拍第2・3類については、その後の研究で類が特定された場合はその類を採用し、その後の研究に記述がない場合は暫定的に第2類とした。「鉢(ハチ)」など和語の類別語彙のなかに含まれている語もあるが、金田一(1980)および奥村氏の一連の研究であがっていれば、それも候補語として抽出した。なお、一部の語については、秋永一枝ほか(1998)も参照した。

以上より、抽出した候補語は、合計865語となる。拍数別にみると、1拍語が58語(第1類34語、第3類17語、その他7語)で、第2類を欠く。2拍語は325語(第1類79語、第2類58語、第3類63語、第4類72語、第5類5語、その他48語)で、すべての類に候補語がある。しかし、第5類は5語しかなく、他の類と比べて著しく少ない。3拍語は473語(第1類90語、第4類71語、第5類164語、第6類75語、第7類71語、その他2

語)で、第2・3類を欠く。和語においても、3拍第3類を類としてたてるかどうか、研究者によって意見がわかれるが、それを除くと、和語は1~3拍語すべてに類がたてられているのに対して、漢語は1・3拍語で類を欠いており、和語と同様に扱うことができないことがわかる。以下、紙面の都合上、2・3拍語に限定して述べていく。

3. 対象地域

今回対象とした地域は、「中央式」から京都市・高知市・徳島市・今治市の計4地域、「讃岐式」から丸亀市(飯岡)の1地域、鹿児島、共通語である。これらの地域での状況を比較し、類語として妥当かどうかを検証する。「中央式」のうち、京都市のデータは、平山編(1960)と中井(2002)による(前者を京都①、後者を京都②とする)。高知市のデータは中井(1997a)、徳島市のデータは中井(1999)による。今治市のデータは、筆者の調査(老年層1名。秋山(2017)の話者と同じ)による。「讃岐式」の丸亀市のデータは、中井(1998)による。鹿児島のデータは、平山編(1960)による。共通語のデータは、平山編(1960)と金田一監修(2014)による(前者を共通語①、後者を共通語②とする)。各地域の型を示すと、次のようになる。

「中央式」(京都市・高知市・徳島市・今治市) ※京都市では、第4類はH1型となる

2拍語 第1類H0/第2・3類H1/第4類L0/第5類L2

3拍語 第1類H0/第4類H2※/第5類H1/第6類L0/第7類L2

「讃岐式」(丸亀市) ※第5類はH1型も

2拍語 第1・3類H0/第2類H1/第4類L0/第5類L2

3拍語 第1・5類H0※/第4類H1/第6類L0/第7類L2

鹿児島(平安末頃京都で高起始まりの語がA型、低起始まりの語がB型)

2拍語 第1・2類A/第3・4・5類B

3拍語 第1類A/第4・5・6・7類B

共通語 第5類は、現在1型となっている語が多いが、本来の2型として考察する。

2拍語 第1類0/第2・3類2/第4・5類1

3拍語 第1・6類0/第4類3/第5類2※/第7類1

4. 新・漢語類別語彙(暫定版)の認定

各地域の比較検討により、「その類の語として認定できる語(類語)」「類語に準じる語(準類語)」、「その類の語として認定できない語(非類語)」「今回の調査では類語かどうか確定できずさらなる調査が必要な語」にわけた。以下では、「類語」「準類語」を示す。また、金田一(1980)・奥村氏の研究であがっている類とは別の類の可能性のある語(分類上は、「非類語」に含む)がある場合は、それも示す。各地域で例外的な型をとる場合、その型のみであれば、()に地域・型を記し、併用に例外的な型があれば、型の後に「も」を付す。副詞的用法など用法により型が異なる可能性のある語は、※を付す。一部の地域のデータしかない語(全地域の比較ができないため、「準類語」と判断した語)は、■を付す。

2 拍語

第1類 (候補語 79 語)

類語……^{イシヤ}医者(鹿児島 B)・^{イス}椅子(高知・徳島 H1)・^{ウメ キヤク}梅・客(今治 H1 も)・^{キヤク}逆(鹿児島 B)・^{キョウ}急・^{ゴ マ}胡麻(鹿児島 B)・^{サン}三※・^{ジャマ}邪魔(鹿児島 B)・^{シヨロ}棕櫚(共通語①1 も)・^{ジュン}順・^{シヨク}食(京都②・今治 H1 も)・^{タク}宅(今治 H1)・^{テキ}敵(高知 H1)・^{テン}点(高知 H1 も, 徳島 H1)・^{トク}得(今治 H1 も)・^{バン}晩・^{フ ジ}無事(京都①L0, 京都②L0)・^{ボウ}棒 計 19 語

準類語…^{カク}格■(京都②・今治 H1)・^{キョク}曲■(丸亀 H1, 共通語①・②1 も)・^{ジョウ}情(徳島・今治 H1, 鹿児島 B)・^{シヨク}職(京都②H1 も, 東京①2 も)・^{セキ}席(共通語①1 も, 共通語②1)・^{ソク}俗(今治 H1, 共通語①1 も)・^{ゾク}賊(京都①・今治 H1)・^{トク}徳(高知・今治 H1)・^{ヒツ}櫃(徳島 L0, 今治 H1 も, 鹿児島 B)・^{ヒョウ}表(京都②L0 も, 今治・丸亀 H1)・^{ヘイ}塀(京都②・今治 H1 も, 徳島 H1, 鹿児島 B)・^{ヘン}偏(京都・今治 H1 も, 徳島 H1)・^{リク}陸(共通語①・②2 も)・^{レイ}礼※(京都②L0 も, 共通語②1 も)・^{ロク}碌(今治 H1, 共通語②2 も) 計 15 語

別の類の可能性のある語 (6 語)

第2類の可能性のある語…^{キョウ}興・^{コツ}骨・^{サン}産 第3類の可能性のある語…^{サク}作
第4類の可能性のある語…^{キョウ}灸・^{クン}訓

第2類 (候補語 58 語)

類語……^{イジ}意地・^{シチ}七・^{ヨソ}余所(共通語①1 も) 計 3 語

準類語…^{ゴザ}御座(鹿児島 B, 東京②1) 計 1 語

別の類の可能性のある語 (10 語)

第3類の可能性のある語…^{イチ}一※・^{カク}画・^{ギリ}義理・^{ソン}損・^{ダン}檀・^チ知恵・^{ハチ}八※・^{ヒヤク}百※・^フ風呂・^{ロク}六※

第3類 (候補語 63 語)

類語……^{カン}寒・^{キク}菊・^{サク}柵(共通語①・②1 も)・^{サン}棧・^{ジク}軸・^{シチ}質(徳島 L0)・^{シヤク}尺(丸亀 H1 も)・^{ジュズ}数珠(高知 L2 も)・^{シヨウ}性(京都②H0 も)・^{セワ}世話(丸亀 H1 も)・^{ダン}段・^{デシ}弟子・^{ドク}毒・^{ニク}肉・^{ニド}二度※・^{ネツ}熱・^{ハチ}鉢・^{バチ}罰・^{バチ}撥・^{フク}便・^{フク}服(丸亀 H1)・^{フク}福・^{フク}副(丸亀 H1)・^{マク}幕・^{マク}膜・^{ミク}脈(今治 H0 も)・^{ヤク}約(共通語②0)・^{ヨク}欲・^{ラク}楽(鹿児島?)・^{ロウ}牢・^{ロウ}蠟・^{ワク}梓 計 32 語

準類語…^{ガキ}餓鬼(今治・丸亀 L2)・^{キチ}吉(丸亀 H1, 共通語②1 も)・^{サク}柵(京都②H0 も, 丸亀 H1 も, 共通語①1, 共通語②1 も)・^{シキ}式(丸亀 H1)・^{ジツ}実(徳島 L2 も, 丸亀 H1)・^{ジュク}塾・^{ジュツ}術(丸亀 H1, 共通語①1 も)・^{ヨウ}用(丸亀 H1) 計 8 語

第4類 (候補語 72 語)

類語……^{ウン}運・^{カイ}会・^{ガイ}害・^{キョウ}経・^{オウ}王(京都②・今治・丸亀 H1 も)・^{オン}恩(今治 H1 も)・^{ダイ}芸・^{ケン}劍(京都②・丸亀 H1 も)・^{ジュウ}十(今治 H1)・^{シン}芯・^{セン}千(今治 L2)・^{ダイ}台・^{ダイ}題・^{チュウ}中(今治 H1)・^{チヨウ}腸(今治 H1 も)・^{ドウ}胴・^{ドウ}堂(京都②・徳島・今治 H1 も)・^{ハン}判(京都②H1 も, 高知 H1)・^{バン}番(今治 H1)・^{バン}盤(今治 H1 も, 丸亀 H1)・^{フン}糞・^{ミソ}味噌・^{モン}紋・^{レイ}例(鹿児島 A) 計 24 語

準類語…^{エン}縁※(今治 H1)・^{ガン}癌(京都①・高知 H1, 京都②・今治・丸亀 H1 も)・^{コウ}香(京都①・徳島・今治 H1, 京都②H1 も)・^{シヤク}朽(今治 H1 も, 共通語①2 も)・^{セイ}精(高知・今治 H1, 丸亀 H1 も, 鹿児島 A)・^{ダイ}代(今治 H1, 東京②0)・^{チュウ}宙(今治・丸亀 H1 も, 東

京①・②0も)・町(高知・丸亀 H1, 今治 H1 も)・同(京都②・今治 H1 も, 高知 H1, 鹿児島?)・二個■・念(京都①・今治・H1, 共通語①0も)・盆(鹿児島 A, 共通語①0)・瘍(京都①・高知・今治 H1)・類(京都①H1, 京都②H1 も, 鹿児島 A)・論(高知・徳島 H1, 京都②・丸亀 H1 も) 計 15 語

別の類の可能性のある語 (1 語) 第 3 類の可能性のある語…陣

第 5 類 (候補語 5 語: 雁・犀・皮膚・豹・法螺) ※類語・準類語なし

3 拍語

第 1 類 (候補語 90 語)

類語……遠慮・機嫌・麒麟・工夫・故障(高知 H2)・事情(丸亀 H1)・時代(今治 L0 も)・修行(鹿児島 B も)・障子・女中・他人・達摩・調子・内緒・秘密(京都②L0 も)・不思議・葡萄(鹿児島 B)・魔法(丸亀 H1)・微塵・模様・油断(京都②L0 も, 高知 L0)・用事(鹿児島 B)・陸地(丸亀 L0)・理屈 計 24 語

準類語…九年■・五年■(京都②L2 も)・五杯■・五番■・五枚■・詩人(京都②H1 も, 高知 L0)・草履(丸亀 L0, 鹿児島 B)・達者(今治 L0, 鹿児島 B)・法事(京都②H2 も, 徳島 H1) 計 9 語

別の類の可能性のある語 (1 語) 第 6 類の可能性のある語…相違

第 4 類 (候補語 71 語)

類語……愛想(徳島 H0 も)・道具・二月(共通語②0 も) 計 3 語
準類語…脚気(共通語①0)・四角(京都①L2, 京都②L2 も)・四月(共通語②0 も)・地獄(京都②L0 も, 共通語①0)・上手(東京①0)・豆腐(京都②L0 も, 共通語①・②0 も)・道理(徳島 L2, 丸亀 H1)・難儀(共通語②1 も)・二百※・拍子(鹿児島 A, 共通語①・②0 も) 計 10 語

第 5 類 (候補語 164 語)

類語……該当なし 計 0 語
準類語…五寸※(共通語②0 も)・五万※(鹿児島 A)・秩序(丸亀 H1, 共通語①・②1 も)・不孝(京都②L2 も, 丸亀 L2) 計 4 語

別の類の可能性のある語 (8 語)

第 4 類の可能性のある語…苦心・砂糖・七分※・世界・二点※・日本・二万※・八位

第 6 類 (候補語 75 語)

類語……按摩(高知 H0)・硫黄・縁起(高知 H0)・火災・漢字・桔梗(京都②H0 も)・最初・丈夫・真珠(高知 L2)・掃除・太鼓・檀那・茶碗・二階・二重・屏風・楊枝・蓮華(京都②H1 も) 計 18 語

準類語…増加(京都②H1・L2 も, 共通語①1 も)・題字■・檀家■・二乗■・柔和■・飛脚■・陽気■・幼稚(共通語①・②1 も) 計 8 語

第 7 類 (候補語 71 語)

類語……昆布(京都②L3 も)・今夜・最後(丸亀 H1)・坊主・名字 計 5 語

準類語…^{オウジ}王子■・^{キンジョ}近所(高知・丸亀 H0, 京都②H0 も)・^{ガンジ}軍事■・^{サンリ}三里※(高知 H0 も, 徳島 L0 も)・^{センリ}千里※(徳島 L0 も, 丸亀 H1 も)・^{モンク}文句(丸亀 H1, 鹿児島 A)・^{ヨウイ}用意(京都①L0, 共通語①0) 計 7 語

2 拍第 2 類・3 拍第 5 類については、類語・準類語が少なく、独立した類としてたてることが難しい。これは、中井 (1997b) が指摘するように、漢語の基本型と区別できないことによる。2・3 拍語ともに基本型が出やすい傾向がある上に、2 拍第 2 類は、候補語に 2 拍目に特殊音となる語が多く、共通語においては、特殊音により下げ核が前へずれたのか、もともとの型 (1 型) なのかを判断することが難しい。3 拍第 5 類は、候補語として最多の 164 語があがっていたものの、類語として認定できる語はなく、準類語が 4 語あるだけである。

候補語の段階で 5 語しかなかった 2 拍第 5 類については、類語がなく類をたてることができない。その他、今回の調査では類ができない語が多く残るといった問題があり、暫定版ではあるものの、各地域の比較検討により、上記の新・漢語類別語彙の語を認定した。

5. 新・漢語類別語彙 (暫定版) の検証

新・漢語類別語彙 (暫定版) が、諸方言間の対応を示すものとして、また世代間の対応を示すものとして使用できるものかどうかを検証するために、愛媛県東中予地方でもっとも共通語化が進行している松山市方言の若年層 (1 名) をとりあげ、和語との比較をおこなった。具体的には、漢語にも、和語と同様の変化 (共通語化) が起きているのかを確認した。なお、ここでは、別の類の可能性のある語はとりあげず、類語・準類語をとりあげる。

2 拍語では (独立した類として認定の難しい第 2 類, 類語のない第 5 類は考察対象から除く)、共通語化により、和語の第 2・3 類に 2 型, 第 4・5 類に 1 型がみられる。同様に漢語にも、第 3 類に 2 型, 第 4 類に 1 型がみられ、和語とともに共通語化が起きている。

3 拍語では、第 7 類に、和語・漢語ともに 1 型がみられ、和語とともに共通語化が起きているが、第 4 類は、和語と漢語で振る舞いが異なる。和語の第 4 類では、26 語中 22 語に共通語型の 3 型がみられる (総語数に対する 3 型の出現率が 85%) のに対して、漢語第 4 類では、3 型が 14 語中わずか「愛想」の 1 語 (出現率 7%) のみである。松山市では、語末核型が少なく、3 拍第 4 類 (和語) の共通語化が、伝統的な H1 型から非共通語型の 2 型を挟んで共通語の 3 型へという独特の変化を起こしている (秋山 2017) ことから、共通語の 3 型に変化する前の中間段階として、単語単独で同じ型の 0 型をとったということも考えられなくはない。しかし、「愛想」を除く 13 語のうち、8 語が 0 型で、中間段階の型が和語と違う。また、漢語の 3 拍語に、第 4 類以外の語にも語末核型の 3 型が数語ほどしかみられない。2 拍語には多くみられる語末核型が 3 拍語にほとんどみられないのは不審である。漢語、とくに 3 拍第 4 類に語末核語がみられない原因については、複合語規則が関与している可能性が考えられる。現時点で断言はできないが、漢字 1 字で表す語が多い和語に対して、漢語では漢字 2 字あるいは 3 字で表すため、複合語としての意識が働いていた可能性がある。この点については、今後さらに詳細な調査をおこない、明らかにしたい。いずれにせよ、漢語の 3 拍第 4 類を、諸方言間の対応を示すものとして扱うことには問題がある。

6. おわりに

以上より、漢語類別語彙について、2拍第2・5類、3拍第2・5類を欠くこと、また3拍第4類が和語と異なる振る舞いをみせていることなどから、諸方言間（世代間）の対応を示すものとして使用するには問題があることが明らかになった。今後は、今回認定した語について、他地域・他世代のデータを広く収集し、再確認するとともに、今回データ不足から認定できなかった語についてもとりあげ、漢語類別語彙の妥当性をさらに検証したい。

附記

本研究は、JSPS 科研費 17K02733 の助成を受けたものである。

参考文献

- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊編(1998)『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京：東京堂出版
- 秋山英治(2017)『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント-日本語史再建のために-』東京：おうふう
- 奥村三雄(1955)「東西アクセント分離の時期-外来語のアクセント-」『国語国文』24:12,34-44.
- 奥村三雄(1961)「漢語のアクセント」『国語国文』30:1,1-16.
- 奥村三雄(1963)「漢語のアクセント-アクセントから語彙論へ-」『国語学』55,36-53.
- 奥村三雄(1964)「漢語アクセントの一性格」『国語国文』33:2,48-68.
- 奥村三雄(1974)「諸方言アクセント分派の時期-漢語アクセントの研究-」『方言学研究叢書 3』,1-38.
- 奥村三雄(1981)『平曲譜本の研究』東京：桜楓社
- 奥村三雄(1990)『方言国語史研究』東京：東京堂出版
- 金田一春彦(1980)「味噌よりは新しく茶よりは古い-アクセントから見た日本祖語と字音語-」『言語』9:4,88-98.
- 金田一春彦監修・秋永一枝編(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD付き』東京：三省堂
- 中井幸比古(1997a)『高知市方言アクセント小辞典-方言アクセント小辞典(1)-』(科研報告書) (中井幸比古(2002)に再録)
- 中井幸比古(1997b)「讃岐式アクセントと中央式アクセントの対応について」『島田治還暦記念論文集-言葉と文化-』,89-111. (中井幸比古(2002)に再録)
- 中井幸比古(1998)『香川県方言アクセント小辞典-方言アクセント小辞典(2)-』(科研報告書) (中井幸比古(2002)に再録)
- 中井幸比古(1999)『徳島市方言アクセント小辞典-方言アクセント小辞典(3)-』(科研報告書) (中井幸比古(2002)に再録)
- 中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』東京：勉誠出版
- 平山輝男編(1960)『全国アクセント辞典』東京：東京堂出版

The phonetic reduction of nasals and voiced stops in Japanese across speech styles

Yoichi Mukai, Benjamin V. Tucker (University of Alberta)
 mukai@ualberta.ca, bvtucker@ualberta.ca

1 Introduction

In daily conversations, speakers often produce speech in a casual manner. Casual speech, also referred to as spontaneous or conversational speech, contains a high degree of variation as compared to more careful speech styles (Ernestus and Warner, 2011). One important aspect of casual speech leading to this high variability is phonetic reduction, resulting in words being pronounced with fewer segments, shorter durations, and assimilation. For example, *yesterday* pronounced carefully could be something like /jɛstəˈdeɪ/ but in casual speech it could be pronounced [jɛʃeɪ] (Tucker, 2007). Reduced pronunciation variants has been studied cross-linguistically with evidence being reported in American English (e.g., Johnson, 2004; Warner and Tucker, 2011), Dutch (e.g., Ernestus et al., 2002), French (e.g., Brand and Ernestus, 2015), Finnish (e.g., Lennes et al., 2001), German (e.g., Kohler, 1990), and Japanese (e.g., Arai et al., 2007; Maekawa, 2005).

In the present study, we use a large-scale speech corpus, the Corpus of Spontaneous Japanese (Maekawa, 2003), to examine the phonetic variability found in nasals and voiced stops and to describe how that variation and reduction occurs across speech styles in Japanese. Using the Corpus of Spontaneous Japanese, we analyzed the duration and intensity difference of target segments across four styles of speech: academic presentations, simulated public speech, dialogues, and read speech. The intensity difference was defined as the difference between the minimum intensity of the target segment to the averaged maximum intensity of surrounding segments (Tucker, 2011; Warner and Tucker, 2011). We hypothesized that we would observe stronger reduction (more approximant-like productions), as indicated by shorter duration and smaller intensity difference, as speech style becomes more casual. In other words, the shortest duration and the smallest intensity difference would be found for nasals and voiced stops in dialogues (most casual) and the longest duration and the largest intensity difference in read speech (least casual).

2 Methods

2.0.1 Data

We used the Corpus of Spontaneous Japanese, which contains approximately 44 hours of speech (about half million words) from four different speech styles: academic presentations, simulated public speech, dialogues, and read speech (Maekawa, 2003). All acoustic analysis was performed using Praat (Boersma and Weenink, 2016) and the predefined segmental boundaries provided in the corpus.

2.0.2 Analysis

We used linear mixed-effects models with `lme4` and `lmerTest` packages (Bates et al., 2017; Kuznetsova et al., 2015) in R (R Core Team, 2017) to measure whether duration and intensity difference of nasals and voiced stops differs across speech styles, as well as to predict the relative duration and intensity difference of these segments across speech styles. Furthermore, we also ran Bonferroni adjusted post hoc comparisons between `SpeechStyle` and `Phoneme` using the `multcomp` and `lsmeans` packages in R (Lenth, 2017; Torsten Hothorn, 2016). The variables of interest were as follows:

- Dependent variables: `LogDuration`; `LogIntensityDifference` (A log-transformation was applied to attenuate skewness)
- Main predictors: `Phoneme` (nasals: /m/, /n/, /ɲ/; voiced stops /b/, /d/, /g/); `SpeechStyle` (`AcademicPresentation`, `SimulatedPublicSpeech`, `Dialogue`, and `ReadSpeech`)
- Control variables: `SpeakerAge`, `WordDuration`, and `PhonemeEnvironment` (`Word-initial`, `-medial`, `-final`)

All the control variables were included in the models as long as the variables significantly contributed to the fit of the model. We also included Speaker as a random intercept and SpeechStyle by Speaker as a random slope.

3 Results & Discussion

3.1 Duration

Statistical analysis of nasal duration across speech styles, visualized in Figure 1, revealed that there is a main effect of SpeechStyle [$F(3,8)=13.3, p<0.001$] and Phoneme [$F(2,138229)=2829.1, p<0.001$] as well as an interaction between SpeechStyle and Phoneme [$F(6,137122)=44.0, p<0.001$]. Individual comparisons of /m/ across speech styles revealed that the duration of /m/ is longer for the read speech in comparison to simulated public speech ($t=-4.7, p<0.001$) and academic presentations ($t=-5.97, p<0.001$). The /m/ nasal durations in simulated public speech are also significantly longer than in academic presentations ($t=3.77, p<0.01$). The comparisons between dialogues and academic presentations, as well as dialogues and simulated public speech, are not significant. We also identified that /n/ follows a similar pattern to /m/ where the

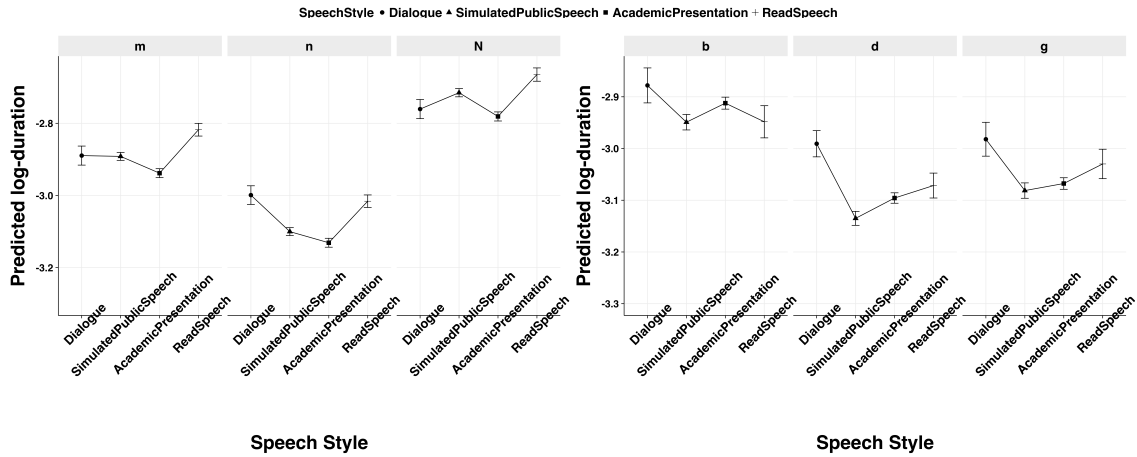


Figure 1: Interaction effect of Phoneme and SpeechStyle on log-duration

duration of /n/ for read speech is the longest among the other speech styles [Dialogue and ReadSpeech ($t=-3.61, p<0.01$); AcademicPresentation and ReadSpeech ($t=-5.56, p<0.001$); SimulatedPublicSpeech and ReadSpeech ($t=-3.05, p=0.05$)]. We also found that the /n/ durations of simulated public speech are significantly longer than academic presentations ($t=5.24, p<0.001$). The comparisons between dialogues and academic presentations, as well as dialogues and simulated public speech, are not significant. Analyses of /n/ revealed a different pattern from both /m/ and /N/ in which the /n/ duration for both dialogues and read speech are longer (no significant difference between Dialogue and ReadSpeech) than simulated public speech and academic presentations [Dialogue and SimulatedPublicSpeech ($t=4.97, p<0.001$); Dialogue and AcademicPresentation ($t=4.55, p<0.001$); SimulatedPublicSpeech and ReadSpeech ($t=-5.52, p<0.001$); AcademicPresentation and ReadSpeech ($t=-5.77, p<0.001$)]. The comparisons between dialogues and read speech, as well as academic presentations and simulated public speech, are not significant. Figure 1 indicates in the left panel that dialogues show the shortest durations and read speech displays the longest durations for both /m/ and /N/, as predicted. However, simulated public speech and academic presentations indicate no difference or an opposite relationship and does not fit with our prediction, in which simulated public speech should have longer duration than academic presentations. A possible explanation for this is that academic presentations are often prepared speech that are highly contentful, allowing speakers to deliver a very dense talk faster than unprepared speech. This might be the source of the shorter durations in academic presentations. Research has also found that the faster speech rate leads to more instances of reduction (Brand and Ernestus, 2015). Additionally, as seen on the left side of Figure 1 in the middle panel, /n/ shows an unexpected pattern in which there is no difference between dialogues and read speech, and both simulated public speech and academic presentations display shorter duration than dialogues and read

speech. It is possible that there is a particular word that is common in dialogues but that does not occur in the other speech styles causing this effect. However, further analysis is needed to explore this pattern and confirm our hypotheses about this effect.

Analyses of the duration of voiced stops across speech styles also revealed a main effect of SpeechStyle [F(3,10)=7.53, $p<0.01$] and Phoneme [F(2,37910)=125.99, $p<0.001$] as well as an interaction between SpeechStyle and Phoneme [F(6,36380)=3.40, $p<0.01$]. Voiced stops display different patterns, both from what we predicted and the pattern of nasals. Individual comparisons of the /b/ duration across speech styles revealed that all the comparisons are not significant. We also found that the duration of /d/ is longer for dialogues than for both academic presentations ($t=3.57$, $p<0.05$) and simulated public speech ($t=6.05$, $p<0.001$), but other comparisons are not significant. Although /g/ shows a similar pattern to /d/, none of the comparisons among the speech styles in /g/ are significant in this data set. As shown on the right side of Figure 1, the results do not follow our predictions for speech style. In addition, fewer comparisons in voiced stops reached significance as compared to in nasals. In order to further examine these tendencies, we conducted additional analyses by segmenting the stops into two parts: closure duration and release duration. The closure duration was defined as the duration from the offset of the preceding segment to the onset of a burst release, and the release duration was defined as the duration from the onset of a burst release to the onset of the following segment. However, due to the approximated articulation of stops, especially for dialogues, a number of the stops did not have closure and release durations as a separate unit, meaning that the boundary between the offset of closure duration and the onset of release duration was unclear. Table 1 illustrates the numbers of the stops with clear boundary between closure and release durations and with no boundary between the two durations across speech styles. As expected, the number of the stops with no boundary is the highest in dialogues and the lowest in read speech. For the following analysis, the stops with clear boundary (83,957 stops) were utilized.

Table 1: Number of voiced stops with ClearBoundary and NoBoundary and their ratio

SpeechStyle	ClearBoundary	NoBoundary	Total	BoundaryRatio	NoBoundaryRatio
Dialogue	4164	236	4400	94.64	5.36
SimulatedPublicSpeech	39839	1889	41728	95.47	4.53
AcademicPresentation	36556	1408	37964	96.29	3.71
ReadSpeech	3398	40	3438	98.84	1.16

3.1.1 Closure duration

Figure 2 illustrates an interaction between phonemes and speech style on release and closure durations. Statistical analysis of closure duration across speech styles demonstrated a main effect of SpeechStyle [F(3,15)=3.85, $p<0.05$] and Phoneme [F(2,36253)=184.78, $p<0.001$] as well as an interaction between SpeechStyle and Phoneme [F(6,33554)=5.936, $p<0.001$]. Individual comparisons of /b/ across speech styles revealed that none of the differences in closure duration across speech styles reached significance. For /d/, we found that relationships among the speech styles differ from that of /b/ where the closure duration of /d/ for dialogues is longer than for simulated public speech ($t=7.07$, $p<0.001$), and we also identified that the /d/ closure duration for simulated public speech is shorter than for both academic presentations ($t=-4.0500$, $p<0.01$) and read speech ($t=-3.82$, $p<0.01$). The other comparisons are not significant. The /g/ closure duration displays similar relationships among the speech styles to /b/ but the degree of durational differences across speech style are small; therefore, none of the differences reached significance. Figure 2 in the left panel indicates that closure duration shows a similar pattern to the entire stop duration where the durations are the longest in dialogues and the shortest in simulated public speech, but the degree of durational differences across speech styles for closure durations are smaller than for the entire stop durations.

3.1.2 Release duration

Likewise, analyses of release duration across speech styles revealed that there is a main effect of SpeechStyle [F(3,12)=4.12, $p<0.05$] and Phoneme [F(2,38921)=578.30, $p<0.001$] as well as an interaction effect between SpeechStyle and Phoneme [F(6,38632)=15.16, $p<0.001$]. We identified that the release duration of /b/ in dialogues is the longest among the other speech styles [Dialogue and SimulatedPublicSpeech ($t=4.12$, $p<0.01$); Dialogue and AcademicPresentation ($t=4.83$, $p<0.001$); Dialogue and Read-

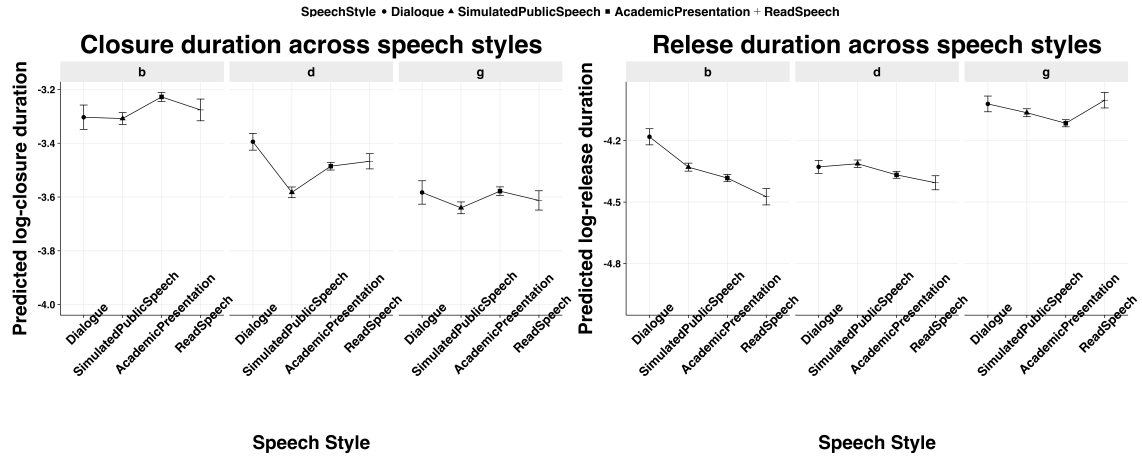


Figure 2: Interaction effect of Phoneme (voiced stops) and SpeechStyle on log-release and closure duration

Speech ($t=5.17, p<0.001$)). We also found that the /b/ release duration for simulated public speech is longer than for read speech ($t=4.06, p<0.01$). The comparisons between academic presentations and read speech, as well as academic presentations and simulated public speech, are not significant. Individual comparisons of /d/ across speech styles revealed that release duration of /d/ displays similar relationships among the speech styles to /b/ but the degree of the differences are smaller. The /d/ release duration for simulated public speech is longer than for read speech ($t=3.30, p<0.05$), but all other comparisons did not reach significance. As shown by Figure 2 in the right panel, the /g/ release duration also indicates similar relationships among the speech styles to the other two stops except that read speech is relatively longer. Similarly, the degree of durational differences for /g/ across speech styles are small; therefore, none of the differences reached significance. As in the results of the entire duration of voiced stops, we identified an overall tendency towards the release duration being longer in casual speech (i.e., dialogues and simulated public speech) as compared to careful speech (i.e., academic presentation and read speech) except /g/. Interestingly, although the overall tendency was opposite to what we expected, release duration displayed consistent durational differences across speech styles. Additionally, the number of significant differences were greater than that of the entire duration of voiced stops. As a result, our findings here suggest that speech style difference is better reflected in release duration than the entire duration of the voiced stop. Importantly, as shown by the both panels of Figure 2, the relationships among the speech styles in closure and release durations vary, suggesting that the way in which speech styles impact release and closure durations differ.

3.2 Intensity difference

Figure 3 illustrates an interaction between phoneme and speech style on intensity difference. Analyses of intensity difference in nasals across speech styles demonstrated that there is a main effect of SpeechStyle [$F(3,12)=16.8, p<0.001$] and Phoneme [$F(2,138612)=5168.7, p<0.001$] as well as an interaction between SpeechStyle and Phoneme [$F(6,137983)=51.7, p<0.001$]. Individual comparisons of /m/ across speech styles revealed that the intensity difference of /m/ in academic presentations are greater than in read speech ($t=3.73, p<0.01$). Other comparisons did not reach significance. Analysis of /n/ revealed that relationships among the speech styles in /n/ is similar to that of /m/ in which the /n/ intensity difference for dialogues is smaller than for academic presentations ($t=-3.24, p<0.05$). We also found that the /n/ intensity difference for simulated public speech is greater than both for read speech ($t=3.43, p<0.05$) and academic presentations ($t=7.42, p<0.001$). The /n/ intensity difference shows different relationships among the speech styles from that of both /m/ and /n/ but none of the differences reached significance. As shown by Figure 3 in the left panel, /m/ and /n/ display a similar pattern in which dialogues contain a smaller intensity difference as compared to both simulated public speech and academic presentations, as well as simulated public speech possesses a smaller intensity difference as compared to academic presentations. However, unlike our prediction, the intensity difference of read speech is smaller than that of both simulated public speech and

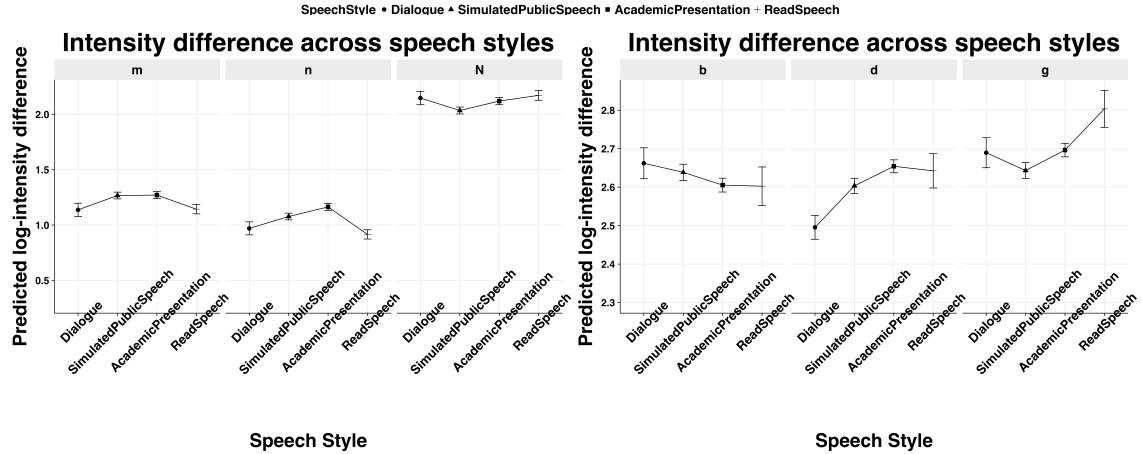


Figure 3: Interaction effect of Phoneme and SpeechStyle on log-intensity difference

academic presentations in both /m/ and /n/. Additionally, the intensity difference of /N/ are similar across speech styles except that simulated public speech shows a smaller intensity difference than the others. A possible explanation for this could be that due to the sonority hierarchies, the intensity difference between stops (oral stops) and neighbouring sounds (most likely vowels) is expected to be smaller than the intensity difference between nasals (nasal stop) and neighbouring sounds (most likely vowels). This means that inherently voiced stops have more space to indicate reduction by a smaller intensity difference than nasals. It is possible that the intensity difference measurement is more appropriate to measure reduction for voiced stops (oral stops) than nasals (nasals). This account is reflected in the results of voiced stops.

Analyses of intensity difference in voiced stops revealed that there is no main effect of SpeechStyle but there is a main effect of Phoneme [$F(2,38816)=61.61, p<0.001$] and an interaction between SpeechStyle and Phoneme [$F(6,38831)=25.55, p<0.001$]. Individual comparisons of /b/ across speech styles indicate that none of the differences among the speech styles reached significance. Analyses of the /d/ intensity difference show that the relationships among the speech styles in /d/ differ from that of /b/ where the /d/ intensity difference for dialogues is smaller than for both academic presentations ($t=-5.51, p<0.001$) and read speech ($t=-3.25, p<0.05$). We also found that the /g/ intensity difference in simulated public speech is smaller than in read speech ($t=-3.22, p<0.05$). The other comparisons are not significant. As shown by the right panel in Figure 3, the relationships among the speech styles in /d/ and /g/ display, to a great extent, what we expected and the intensity differences across speech styles are relatively consistent. The intensity difference is smaller in more casual speech styles (i.e., dialogues and simulated public speech) as compared to careful speech (i.e., academic presentation and read speech). Our findings here support what we discussed above that the intensity difference measure is more useful for voiced stops than for nasals.

4 Conclusion

In the present study, we used a large-scale spontaneous speech corpus to examine the phonetic variability of nasals and voiced stops in Japanese. We attempted to account for how the variation and reduction of nasals and voiced stops occur across speech styles by measuring the duration and the intensity difference of target segments. We hypothesized that the shortest duration and the smallest intensity difference would be observed in dialogues and the longest duration and the largest intensity difference in read speech. Unlike what we predicted, the phonetic variability exhibited complex patterns across both phonemes and speech styles. As a result, our findings revealed a few important aspects of the phonetic variability and the effect of speech styles. First, the way in which speakers reduce segments is not consistent across both speech style and phoneme. That is, the way speakers implement reduction is variable depending not only on speech style but phoneme. Second, the relationships among the speech styles in closure and release durations vary. In other words, the way in which speech styles influence closure and release durations differ. Third, the intensity difference measure is more useful for voiced stops than for nasals. Further research is needed

to investigate the instances where the segment is deleted and the segments that are realized as different phonemes (e.g., /d/ → [r]).

References

- Arai, T., Warner, N., and Greenberg, S. (2007). “Analysis of spontaneous Japanese in a multi-language telephone-speech corpus”. *Acoustical Science and Technology*, 28:1, 46–48.
- Bates, D., Maechler, M., Bolker, B., and Walker, S. (2017). “Package lme4”. *R package version*, 1.1-13.
- Boersma, P. and Weenink, D. (2016). “Praat: doing phonetics by computer [Computer program]”.
- Brand, S. and Ernestus, M. (2015). “Reduction of obstruent-liquid-schwa clusters in casual french”. In *the 18th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS 2015)*.
- Ernestus, M., Baayen, H., and Schreuder, R. (2002). “The recognition of reduced word forms”. *Brain and Language*, 81:1–3, 162 – 173.
- Ernestus, M. and Warner, N. (2011). “An introduction to reduced pronunciation variants”. *Journal of Phonetics*, 39:3, 253–260.
- Johnson, K. (2004). “Massive reduction in conversational American English”. In *Spontaneous speech: Data and analysis. Proceedings of the 1st session of the 10th international symposium*, (pp. 29–54). Tokyo, Japan: The National International Institute for Japanese Language.
- Kohler, K. J. (1990). “Segmental reduction in connected speech in german: Phonological facts and phonetic explanations”. *Speech production and speech modelling*, 55, 69–92.
- Kuznetsova, A., Brockhoff, P. B., and Christensen, R. H. B. (2015). “Package lmerTest”. *R package version*, 2.
- Lennes, M., Alarotu, N., and Vainio, M. (2001). “Is the phonetic quality of unaccented words unpredictable? an example from spontaneous finnish”. *Journal of the International Phonetic Association*, 31:1, 127–138.
- Lenth, R. (2017). “Package lsmeans”. *R package version*, 2.26-3.
- Maekawa, K. (2003). “Corpus of Spontaneous Japanese: Its design and evaluation”. In *ISCA & IEEE Workshop on Spontaneous Speech Processing and Recognition*.
- Maekawa, K. (2005). “Toward a pronunciation dictionary of Japanese: Analysis of CSJ”. In *Proceedings of Symposium on Large-Scale Knowledge Resources (LKR2005)*, (pp. 43–48).
- R Core Team (2017). “R: A language and environment for statistical computing”. *R Foundation for Statistical Computing. Vienna, Austria*.
- Torsten Hothorn, Frank Bretz, P. W. R. M. H. A. S. S. S. (2016). “Package multcomp”. *R package version*, 1.4-6.
- Tucker, B. V. (2007). *Spoken word recognition of the reduced American English Flap*. phdthesis, The University of Arizona.
- Tucker, B. V. (2011). “The effect of reduction on the processing of flaps and /g/ in isolated words”. *Journal of Phonetics*, 39:3, 312–318.
- Warner, N. and Tucker, B. V. (2011). “Phonetic variability of stops and flaps in spontaneous and careful speech”. *The Journal of the Acoustical Society of America*, 130:3, 1606–1617.

壱岐勝本方言のアクセント体系とアクセント単位¹

与那国町教育委員会 中澤 光平

1. はじめに

本発表は、長崎県壱岐島の勝本浦で話されている勝本方言のアクセント体系およびアクセント単位について、発表者の調査データをもとに考察することを目的とする。

2. 壱岐市勝本及び勝本方言について

壱岐島は、九州北方の玄界灘にある島で、九州と対馬の中間に位置する。現在は島全体が壱岐市の1市体制だが、2004年に合併するまでは戦後長らく芦辺町（北東）、石田町（南東）、郷ノ浦町（南西）および勝本町（北西）の4町に分かれていた。

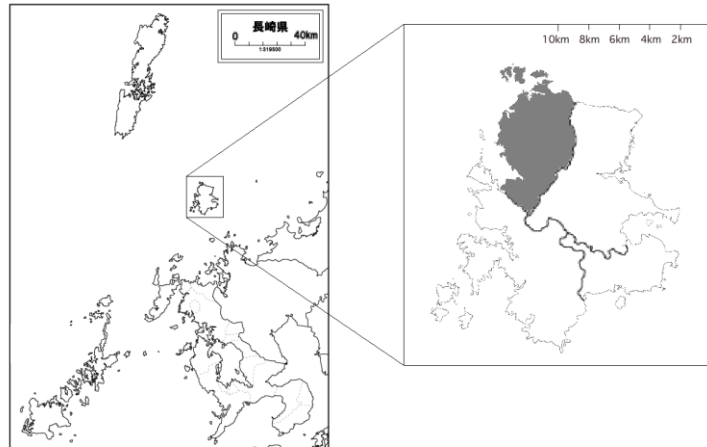


図1 壱岐島および勝本町（灰色部分）の位置

壱岐市は長崎県に属するが、「交通・交易は古くから

福岡との間に栄えている」（岡野信子 1983: 145）ため、壱岐方言はむしろ筑前に近いと考えられる。地元の研究者による鳥巢修（2008）も、「壱岐は、江戸期に平戸藩に属していたが、交通・交易も福岡・佐賀との間が盛んであったため、方言の様々な面で長崎本土と違い旧筑前や旧豊前に似たところがある」（p.10）と述べる。また、壱岐方言内部の地域差について、岡野（1983）は、「地域差がさほど著しくないが、南東部の石田町の方言は概して古風であり、北部の勝本浦の方言には新化が認められる」として、勝本浦（勝本町の漁村集落）の方言に特色があることを述べる。勝本浦を含む勝本町は、特にアクセントの点で他の三町（ただし郷ノ浦北部の沼津は勝本型）と大きく異なることが、先行研究で指摘されている（平山輝男 1951、金田一春彦 1954、岡野 1983）。

3. 先行研究

勝本方言を含む壱岐方言のアクセントに関する先行研究には平山（1951）、金田一（1954）、岡野（1983）、池田史子（2004）などがある。壱岐方言のアクセントに関する先行研究の記述をまとめると次のようになる。

¹ 本研究は国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクト代表者：窪菌晴夫）による「若手研究者のためのアクセント調査旅費」プログラムの支援を受けている。

(1) 平山 (1951) による壱岐方言の名詞アクセント

一音節名詞	中・南部	H-L / H-L (-が ^等 / -の, ん)	例: 柄 ^カ , 蚊 ^コ , 子 ^コ
		H-L / L-L (H-H?) (同上)	例: 絵 ^キ , 木 ^キ , 粉 ^コ
二音節名詞	中・南部	LH / LH-L / LH-H (Ø / -が ^等 / -の, ん)	例: 飴 ^{アメ} , 米 ^{コメ} , 鼻 ^{ハナ} ・花 ^{ハナ}
		HL / LH-L / HL-L (同上)	例: 雨 ^{アメ} , 傘 ^{カサ} , 喉 ^{ノド} , 猫 ^{ネコ}
三音節名詞	中・南部	HLL	例: 鳥 ^{カラス}
		LHL	例: 心 ^{ココロ}
		LHH(-L)	例: 頭 ^{アタマ}
四音節名詞	中・南部	HLLL	例: あくる日, くちばし
		LHLL	例: あかぎれ, かまぼこ
		LHHL	例: 鉢巻き, 雨傘
		LHHH(-L)	例: 薙刀, 小刀

H: 高い拍。L: 低い拍。以下同様。

母音の無声化は省略した。平山 (1951) の北部は勝本型を, 中・南部はそれ以外の型を表す。これを見ると, 一音節名詞 (1 拍語) には 2 つの型 (一部で中和), 二音節名詞 (2 拍語) には 2 つの型 (一部で中和), 三音節名詞 (3 拍語) には 3 つの型, 四音節名詞 (4 拍語) には 4 つの型があると認めているようである。北部と中・南部との違いは 2 拍語の類別語彙の統合の仕方にあると述べている (類別語彙の統合については後述)。

(2) 金田一 (1954) による壱岐方言の名詞アクセント

壱岐主流方言	LH ~ LH-L (-が)	例: 風, 牛, 音, 石
	LH ~ LH-H / LH-L (-の / -が)	例: 皮, 足
	HL ~ HL-L (-が)	例: 海, 箸, 秋, 猿
壱岐西北部方言	HL ~ HL-L (-が)	例: 風, 牛, 音, 石
	HH ~ HH-H / HH-L (-の / -が)	例: 皮, 足
	HL ~ HL-L (-が)	例: 海, 箸, 秋, 猿

金田一 (1954) は 2 拍語のみの考察に限るが, 壱岐主流方言に 3 つの型を認め, 西北部方言 (勝本型に相当) に 2 つの型を認めている。

(3) 岡野 (1983) による壱岐方言の名詞アクセント

一音節名詞	H-L	二音節名詞	LH, HL	三音節名詞	LHH, LHL, HLL
-------	-----	-------	--------	-------	---------------

岡野 (1983) は, 各型の所属語彙こそ違うが, 石田町も勝本浦も同じ体系と述べている。

4. 勝本方言のアクセント体系

LHL の違いのように、先行研究で一致しない部分は、あるいは歴史的な変化を示しているのかもしれない。このような点を明らかにするため、発表者は壱岐での現地調査を行った。本発表では発表者の調査データをもとに勝本方言のアクセント体系について記述する。

4. 1 調査概要

調査は2013年9月と2017年1月に実施した。2013年の調査は単独形での調査が中心で、2017年の調査は主に助詞付きの形での調査を行った。話者は2013年と2017年で異なる。調査方法は発表者が作成した調査票を読み上げていただく形で行った。各話者とも調査時間は1時間～2時間程度である。

4. 2 名詞のアクセント体系

下に、発表者による壱岐勝本方言の名詞アクセントの調査結果を示した。

表2 壱岐勝本方言の名詞のアクセント体系

型 \ 拍数	1 拍語	2 拍語	3 拍語	4 拍語
1 型	H, H-L	HL, HL-L	HLL, HLL-L	(HLLL, HLLL-L)
2 型		LH, LH-L / LH-H	(LHL, LHL-L)	LHLL, LHLL-L
3 型			LHH, LHH-L / LHH-H	(LHHL, LHHL-L)
4 型				LHHH, LHHH-L

(‘.’の後は1拍助詞「-が / -の」の音調)

n型はn拍(nモーラ)目の後に下がり目がある(=n拍目に下げ核がある)ことを示す。ただし①型では、池田(2004)の助詞Bグループが後続する場合下がり目が消える。

①に示した型は、少数の上に個人差があり、また個人の中でも安定しているものは少ない。

- (5) a. LHL で出た語 欠伸(アキ[˥])、砂糖(サト[˥])、二重(フヂ[˥])、双子(フタゴ[˥])、二つ(フツ)
- b. HLLL で出た語 居眠り(イネリ)、猪(イジ)、金槌(カズチ)、楠(クスノキ)、嘴(クチバシ)、座布団(ザブトン)、魂(タマシ)、手袋(テブクロ)、友達(トモダチ)、鶏(ニトリ)、三日月(ミカズキ)
- c. LHHL で出た語 此間(コイダ[˥])、筍(タケノコ)、物陰(モノカゲ[˥])

HLLL はある程度の語数が見られるが、LHL と LHHL はほとんど確認できなかった。

このように、壱岐勝本方言のアクセントは、類別体系や共時的アクセント型の偏りから、名詞に関して概ね2つの型の区別(①と③)しかないように見えるが、調査語数を増やすと①と③に収まらない語が出てくることから、核の位置が弁別的な体系と位置付

けられる。ただし無核型を欠くため、1 拍語に 1 種類、2 拍語に 2 種類、3 拍語に 3 種類、…と、n 拍語に n 種類のアクセント型があることになる。

4. 3 不定語を含む文のアクセント

壱岐勝本方言のアクセント体系は、付属語を含む文節がそのアクセント単位となり、名詞の核の位置と助詞の種類でアクセント型が決まることが分かった。一方で、一部の環境ではこの原則から外れることが、今回の調査で明らかになった。例外的なアクセント型が観察される環境の一つとして、「何、誰」などの疑問詞が不定語となる場合、不定語を含む文節全体が、後続する助詞が助詞 B グループでなくとも下がり目を失う。

- (6) ナニ LH (何), ナニガ アル LHL HL (何がある), ナンバ タベチモ ヨカヨ LHH HHHL HLL(↑) (何を食べても良いよ) ※(↑)は上昇調イントネーションを表す。以下同じ。

「バ」は「ガ」と同様に助詞 A グループなので通常は低く付く(例: イヌバ LHL (犬を))が、(6)ではナンバ LHH という予想 (LHL) と異なる音調を取る。

疑問詞が助詞「モ」を伴い不定詞と解釈されるとき、「モ」が疑問詞を含む文節に含まれる場合は、「モ」の直前に下がり目が来る。「モ」が疑問詞を含む文節に含まれない場合は、疑問詞を含む文節が平板化する。

- (7) イツ LH (何時), イツマデモ アル LHHHL HL (何時までもある), イツマデ タッチモ オワラン LHHH HHHL HLLL (何時まで経っても終わらない) cf. ナミマデ LHLL (波まで)

また、「モ」が疑問詞とは別の文節にある場合、「モ」の直前まで平板化することがある。

- (8) ナンバ コーチモ ヨカヨ LHH HHHL HLL(↑) (何を買っても良いよ) cf. コーチ HLL

5. 考察

名詞のアクセント調査から、勝本方言は非常に偏りがあるものの、核の位置が弁別的な体系と解釈されることを示した。ただし無核型を欠き、助詞 B グループが後続する場合に限り、-①型は下がり目が消える。しかし、不定語を含む文では、助詞 A グループでもナンバ LHH (何を) のように下がり目が消え、無核型を認める必要があるように思われる。

この現象については、例外的に無核型を認めるのではなく、この場合も「モ」の直前に下がり目が生じることから、疑問詞から「モ」の直前まで ([疑問詞…]_モ) が、あたかも一語として扱われるものと解釈したい。(9)では[ナンバ コーチ]までを-①型の語と見なす。

- (9) [ナンバ コーチ]モ ヨカヨ LHH HHHL HLL(↑) (何を買っても良いよ)

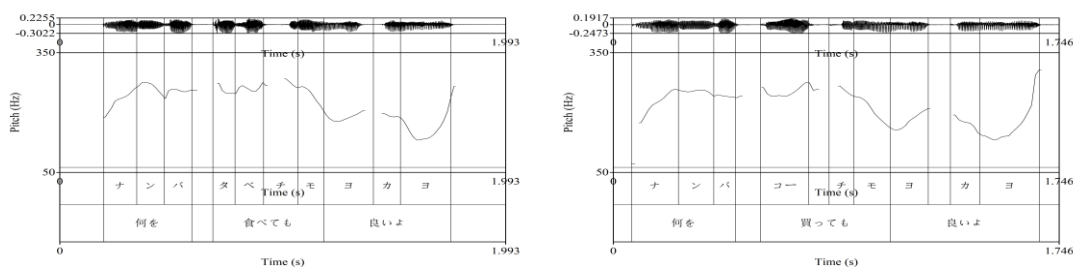


図2 「ナンバタバチモヨカヨ/ナンバコーチモヨカヨ」のアクセント

このような単位を認めることはアドホックにも思われるが、佐藤久美子 (2016) によれば、長崎市方言でも同様の環境において、不定語（疑問詞）から「モ」の直前までが「音韻的な語となる」と分析している。ただし、佐藤 (2016) ではこの「音韻的な語」と「モ」が複合語となるとしているが、壱岐勝本方言では「モ」は助詞 A グループの一般的な振舞いを示すものと解釈される。ただし、(10)のような例は一語化の解釈ができず、課題として残る。

(10) ダレガ イチバデ リンゴバ コーチモ ヨカヨ LHH LHHL HLLL HHHL HLH(↑) (誰が市場でリンゴを買っても良いよ) (イチバデ, リンゴバが元のまま, ダレガだけ平板化)

6. まとめと課題

壱岐勝本方言のアクセントは、長崎市方言にも想定されるような「音韻的な語」を認めることで、無核型の欠けた核の位置が弁別的な体系と解釈できるが、それだけでは説明できない例も残った。また、本発表では扱わなかったが、旧勝本町でも湯本地区など勝本浦以外では LHL などがある程度見られた。近隣方言の調査により、名詞アクセントの著しい偏りが歴史的に生じたことを明らかにできる可能性がある。

謝辞

話者の皆様および話者をご紹介くださった鳥巢修様にお礼申し上げます。

参考文献

- 池田史子 (2004) 「壱岐勝本方言の複合名詞アクセント：後部要素が1拍名詞の場合の複合規則仮説」『山口県立大学国際文化学部紀要』10: 21-27.
- 岡野信子 (1983) 「壱岐・対馬の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』: 143-171.
- 金田一春彦 (1954) 「対馬附壱岐のアクセントの地位—九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか」九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』: 347-373.
- (1974) 『国語アクセントの史的研究』pp.318, 東京, 塙書房.
- (2005) 『金田一春彦著作集 第七巻』pp.754, 町田, 玉川大学出版部.
- 佐藤久美子 (2016) 「長崎市方言における複合法則の適用について」『対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法』研究発表会, 発表資料.
- 鳥巢修 (2008) 『きーちみ しゃべっちみ—壱岐島の方言事例集—』: 長崎.
- 平山輝男 (1951) 「壱岐対馬両方言の音調に就いて」『音声の研究』7: 213-228.

東海地域西部方言のアクセントにおける

「おそあがり」の音声実現の特徴

吉田 健二 (愛知淑徳大学文学部)

kenjiyo.work@gmail.com

1. 問題点

本稿の目的は、名古屋方言アクセントの音声実現上の特徴といわれる、語頭のピッチ上昇のおくれ（以下、「おそあがり」）の音声実現上の特徴を、関東の東京式アクセントとの対比によりあきらかにすることである。東海地域と関東地域、各 5 名の話者の発話データの定量的分析にもとづき、ピッチ動態のどこに関東とことなる特徴が顕著にあらわれるかを検討する。

名古屋を中心とした東海地域には、内輪式アクセント（上野 1987 : 44）が分布し、関東などの中輪式とアクセント体系・音声実現の両面で共通する点がおおい。いっぽう、東海地方に特有の音声実現上の特徴として、(1)にしめすような、おそあがりの傾向が指摘されている（水谷修 1960 : 9 より。ピッチの値は拍単位の L=低 / H=高でしめす）。

(1) (東京) (名古屋) (東京) (名古屋) (東京) (名古屋)

桜 LHH LLH 玉ねぎ LHHL LLHL 東山 LHHHH LLHHH

3 拍以上の語で語頭の上昇が東京などに比べて 1 拍分おくれ、2-3 拍めで実現するということである。水谷（1960）は自発発話にみられるおそあがりの例もしめしており、筆者も東海圏でおそあがりと聴かれる発話をしばしば耳にする。この傾向は、関東方言とことなる、東海方言固有の特徴といえるだろうか。また、ちがいがあるとすれば、具体的にはピッチ実現のどのような特徴にそれがあらわれるのだろうか。この問題を検討するための端緒としておこなった音声データの分析結果と、えられた知見を報告する。

2. 方法

2.1. 話者

東海方言の話者は、愛知淑徳大学文学部「国語学演習」で実施した言語調査でお会いした 5 名で（吉田健二・他 2016, 2017）、表 1 のとおり、愛知県最西端の愛西市旧八開村、立田村、弥富市と、木曾川をへだてて隣接する岐阜県海津市のかたがたである。調査は 2015 年 9 月と 2016 年 9 月に実施しており、内輪式アクセントとみられる話者は 30 名いた。この 5 名はそのなかから、聴覚印象からおそあがりの傾向をもつとおもわれる話者を中心に、代表としてえらんだ。他の話者についてもおなじ分析を実行中である。関東方言の話者は、東海の話者とおよそ同年代の話者を中心に、5 名におねがいをした。表 1 の生育地は 6-15 歳のときにいた場所である。一時的に他の地域に居住した方が 4 名いるが、この期間については、全員、表 1 にしめす地域のみで過ごしている。

表 1: 話者情報

略称	生年	性別	生育地	地域
yatomi30	1987	男	愛知県弥富市	東海
hachikai30	1986	女	愛知県愛西市（旧八開村）	東海
tatsuta30	1987	女	愛知県愛西市（旧立田村）	東海
tatsuta40	1971	男	愛知県愛西市（旧立田村）	東海
kaizu40	1971	男	岐阜県海津市（旧平田町）	東海
tokyo20	1996	女	東京都練馬区	関東
tachikawa30	1978	女	東京都立川市	関東
saitama50	1965	女	埼玉県狭山市	関東
kawasaki40	1977	女	神奈川県川崎市	関東
chiba30	1982	女	千葉県千葉市	関東

2.2. 音声データ

分析対象の音声データは、(2)のような「名詞+の+名詞+断定辞」という構造の短文の読み上げ発話によるものである。文末の断定辞は、なじみのあるものにおきかえてもらった（東海は「やん・じゃんか・だがや」、関東は「じゃん」）。三重の中央式アクセントにおけるダウンステップパターン検討のためのコーパスで（吉田・他 2016）、先行語（ひとつめの名詞）は、中井（2002）で京都の16人全員が高起無核 / 低起無核 / 低起2核で発音した3拍名詞、後続語（ふたつめの名詞、以下「実験語」）はおなじく全員が高起無核 / 低起無核で発音した3～5拍名詞である。後続語16語を京都の音調型ごとに(3)に示す。

(2) 実験文の例

田舎の祭りやん 田舎の野良猫やん お金の悩みごとやん

(3) 実験語（3拍：2語，4拍：5語，5拍：1語）

高起無核 祭り，名前，乗り物，ものまね，日本間，二枚目，難問，悩み事

低起無核 煮豆，マンガ，生ハム，人形，野良猫，持ち逃げ，人間，旦那さん

実験語16語を先行語の3種類の音調型条件においたので、実験文はぜんぶで48種類。発話は各文1回。10名とも実験語のほとんどを無核型（平板型）で発音したので、ひとりにつき平板型のデータが40～46例えられた。

2.3. 音声データのアノテーションとデータ処理

ピッチ動態の定量分析のための代表値を抽出するため、各音声データに、(4)に示すアノテーションをほどこした（以下、音声の基本周波数を f_0 と略称）。図1に2例を示す。

(4) 先行語内の f_0 ピーク：P1（図1の1）

実験語初頭の f_0 の谷：V1（図1の2）

実験語内の f_0 ピーク：P2（図1の3）

ただし、関東の話者および東海の一部（次節参照）に、実験語の初頭にピッチの谷がなく、先行語から連続してピッチが単調に下降するケースがみられた（図1右）。このようなケースでは、V1, P2を確定する基準がえられない。明瞭な谷があるケースとの比較にあたり、とくにP2のタイミングについて、かたよりが最小になる方法として、かりに先行語と後続語の境界時点をV1、後続語の持続時間の中間点をP2とした。

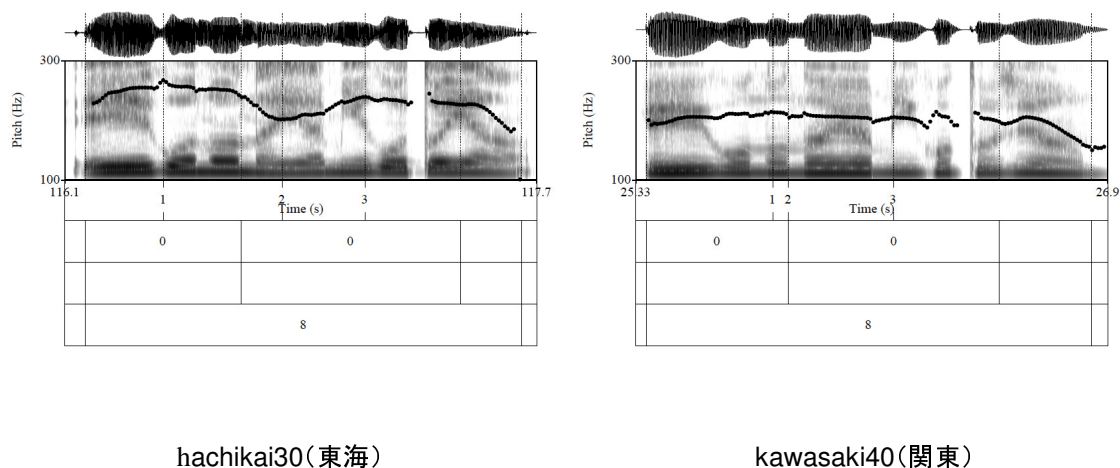


図1: 音声データのアノテーションの例「英語の悩みごとやん」

この方法により確定したP1, V1, P2の3時点について、実現時間とfo値を抽出した。foレンジがおおきくことなる話者間の比較も可能にするため、fo値は各話者の平均値を基準とした標準得点(z-score)に変換した。

3. 結果

3.1. V1からP2にかけてのfo値のうごき

以下では、検討の対象を先行語・実験語ともに平板型のケースにしぼる。先行語も平板型で発音されたケースがおおかったので、各話者最低29例(29-35例)えられている。図2にV1×P2の全ケースのfo値を話者グループ別にしめす。右の関東の5名は、個人によるバラツキが比較的ちいさい。総じて、V1=P2の補助線にそって、その左上にデータがならぶ。先行語と実験語のあいだのピッチの谷(V1)から、実験語のピーク(P2)にかけてちいさな上昇があるケースが大半をしめる、ということである。V1=P2の補助線付近および右下に位置するケースは、2.3節でのべた、先行語から実験語にかけてピッチが単調下降をしめすケースの存在を反映する。

これにたいして、左の東海5名は、話者間・話者内のバラツキがおおきい。2.3節でのべたとおり、yatomi30, kaizu40に前述の先行語から実験語にかけてピッチが単調下降するケースがおおく、V1=P2の補助線付近にデータが集中する。このタイプを関東で典型的にみられるピッチ動態パターンとかんがえ、かりに「関東タイプ」とよぶ。関東タイプは、上記2名だけでなく、数はすくないもののhachikai30, tatsuta40にもみられる。いっぽう、東

海の話者には $V1=P2$ の補助線から左上にややはなれた位置のデータもおおい。先行語と実験語のあいだのピッチの谷 ($V1$) がふかく、そこから実験語のピーク ($P2$) にかけてのピッチ上昇がおおきいことをしめす。このタイプを東海で典型的にみられるピッチ動態として、「東海タイプ」とよぶ。このタイプがおおいのは *tatsuta30* と *tatsuta40* だが、*yatomi30*, *hachikai30* にも数はへるものの、このタイプがみられる。東海の話者には、関東タイプと東海タイプの音声実現タイプが混在している、ということである。

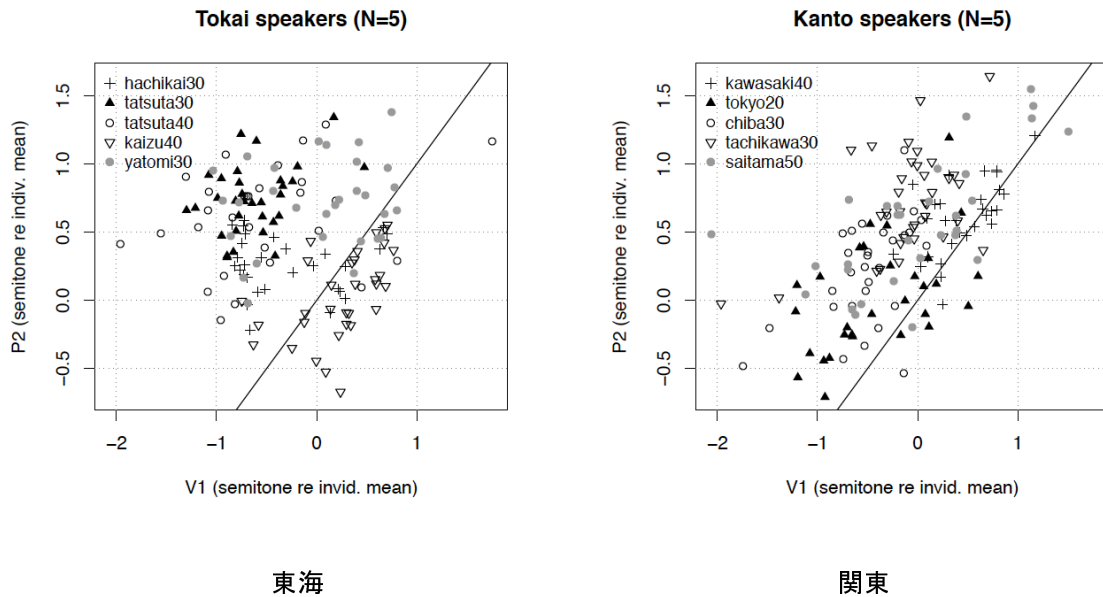


図 2: $V1$ (横軸) x $P2$ (縦軸)の fo 値(話者内 z-score). 斜線は $V1=V2$.

3.2. $P1 \cdot V1 \cdot P2$ の実現タイミング

つぎに、各 fo 代表値が実現したタイミングもあわせてピッチ動態全体の傾向を検討する。話速のちがいを捨象して比較できるよう、実験語の持続時間を 1.0、開始時間を 0.0 として、 $P1$, $V1$, $P2$ の実現時間を相対的時間に変換した。この値からもとめた、3 つの代表値のタイミングと fo 値の話者ごとの平均値を図 3 にしめす。東海の話者は、前節で関東タイプがおおいことを確認した *kaizu40* をのぞき、 $P1$ から $V1$ にかけての下降がおおきく、ふたたび $P2$ にかけておおきく上昇する。結果として、先行語から実験語にかけてのピッチの谷がふかくなる傾向がある。これが東海タイプのピッチ実現上の特徴とかがえられそうである。これにたいして、関東の話者は、下降も上昇もちいさめで、ピッチの谷があさい。いっぽう、 $P1$, $V1$, $P2$ の実現タイミングには、東海・関東におおきな差はみられないが、やはり *kaizu40* をのぞく東海の話者のばあい、 $P2$ のタイミングがややおそい傾向がある。この点については、次節でさらに検討する。

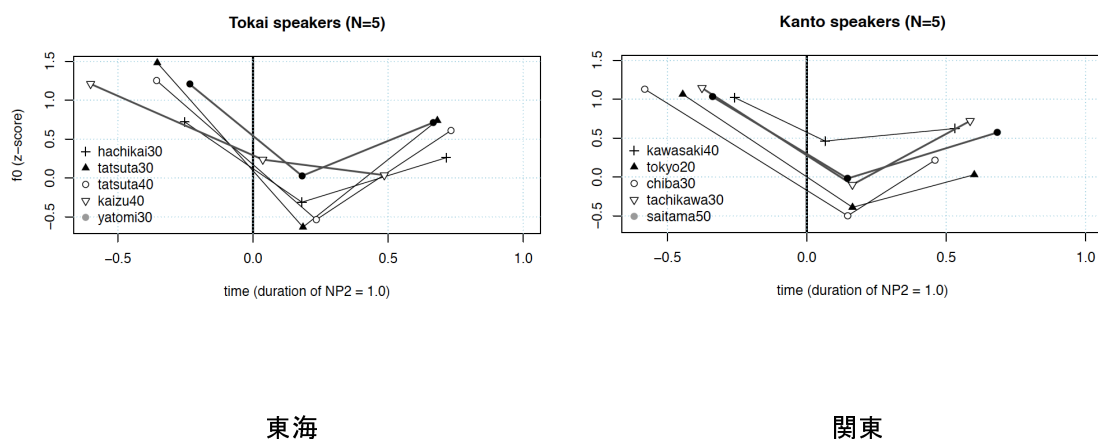


図 3: P1, V1, P2 のタイミングと fo 値の平均値 (実験語の持続時間 = 1.0 / 開始時間 = 0.0)

3.3. fo 値とタイミングによる話者のことなりのパターン

前節まででみた関東と東海のちがいは、1 節で提起した「東海方言固有」といえるだろうか。このことを検討するため、3 つの fo 代表値とそのタイミング、計 6 つの測定値を変数とした主成分分析を実行した。第 1 成分 (寄与率 31%) と第 2 成分 (寄与率 27%) の biplot を図 4 にしめす。太字が 10 名の話者、イタリックが 6 つの測定値のふたつの成分の重みによる位置である。まず話者の位置をみる。kaizu40 をのぞく東海の話者は、第 1 成分が正の領域に分布している。いっぽう関東の話者は第 1 成分で 0 付近または負の領域に分布している。両者が明確に分離していないのは、3.1 節でみたように、東海の話者に東海タイプと関東タイプの音声実現が混在することによるとかんがえられる。その傾向つよかった

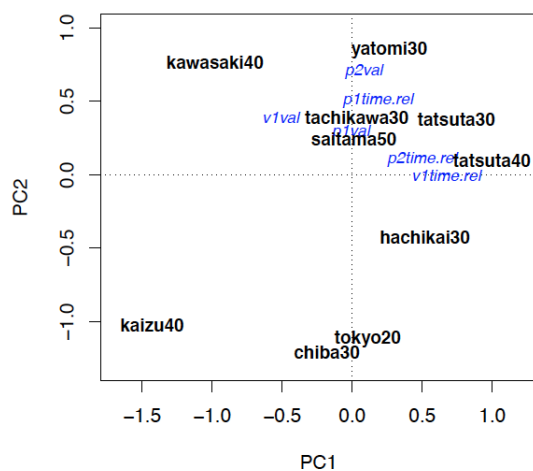


図 4: 6 つの測定値による主成分分析の結果 (第 1 成分 × 第 2 成分)

yatomi30 は、第 1 成分で 0 付近に位置しており、関東の話者とちがいがとらえられている。

つぎに、測定値の位置をみる。上の検討から関東タイプ・東海タイプのちがいをとらえたのは第 1 成分だとかんがえられるが、この重みが正または負におおきい音声特徴は、おおきさの順に (a)P2 の実現時間 (東海がおそい)、(b)V1 の実現時間 (東海がおそい)、(c)V1 の fo 値 (東海がひくい) である。これらは、3.1, 3.2 節で検討した特徴であり、「東海タイプ」固有のピッチ動態上の特徴とかんがえられそうである。

4. まとめと課題

東海アクセントの「おそあがり」傾向の実態を検討した。結果は東海固有の音声実現上の特徴をうかびあがらせたが、同時に、あきらかに関東側に分類される話者 (kaizu40) や、東海固有の音声特徴とともに、共通語的な音声実現もあわせもつ個人が存在することもしめした。東海地域にも当然、共通語化の波が押し寄せており、この結果はそれを反映しているとおもわれるが、水谷 (1960) の報告から半世紀を経てなお、今回対象とした比較的わかり層に、地域固有の音声実現の特徴もみいだされることが確認できた。

「おそあがり」の音声実現上の特徴のひとつに、連続する平板型のあいだのピッチの谷のふかさがあった。東京方言の語頭のピッチ上昇について、弱化したり実現しなかったりすることもあるが、アクセント単位の特徴としてつねに存在するというみかたがあるが (郡 2004)、東海方言アクセントの音声実現にはその傾向がよりつよいとみることができるだろうか。今後の課題としたい。また、これと関連して興味ぶかくおもわれるのが、この地域に、一部の複合名詞の前部・後部要素のあいだにピッチの下降・上昇をおく傾向がみられることである (「英作文」「新横浜」の HHLHLL 型、「反復横跳び」の HLLLLHHH 型など : 吉田・他 2017 : 232-237 で報告)。今回みた、句レベルの接続における谷のふかさが、語レベルの接続 (複合) における、ふたつの要素の韻律上の独立性のつよさと関連する可能性、たとえば、両者ともに東海方言に一般的な韻律上の特徴の反映である、というような可能性はないだろうか。これも今後の検討課題としたい。

謝辞 音声データを提供してくださったみなさまに感謝申し上げます。また、名古屋音声研究会の研究例会上で、重要なコメントをいただきました。この研究は、愛知淑徳大学の「学外教育等活動」予算および、文部科学省科学研究費助成金 (「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」研究代表者 : 窪菌晴夫, 課題番号 26244022) による助成を受けています。

参考文献

- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42:1, 15-70.
- 郡史郎 (2004) 「東京アクセントの特徴再考－語頭の上昇の扱いについて－」『国語学』55:2, 16-31.
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』東京 : 勉誠出版
- 水谷修 (1960) 「名古屋アクセントの一特質 (前半)」『音声学会会報』102, 8-10.
- 吉田健二・他 (2016) 「三重・愛知県境方言における方言の接触と変容」『愛知淑徳大学国語国文』39, 218-250.
- 吉田健二・他 (2017) 「愛知・岐阜・三重県境地域における言語使用と言語意識」『愛知淑徳大学国語国文』40, 207-242.